



3

同窓会のあゆみ

1 | 鴻文会(人文学部)

昭和 56(1981)年	人文学部同窓会「鴻文会」発足 初代会長に和田敏英氏(英米文学)就任 「鴻文会会報」創刊
昭和 57(1982)年	鴻文会名簿発行
平成 7(1995)年	連絡事務所を開設
平成 11(1999)年	山口大学同窓会連合会が結成
平成 18(2006)年	「留学生への奨学金支給」制度開始
平成 23(2011)年	鴻文会 30 周年

鴻文会のあゆみ

鴻文会会長 岡光 一浩(山口大学名誉教授)

文理学部文学科と人文学部との卒業生を中心に構成されている同窓会「鴻文会」の発足は、文理学部が昭和 53(1978)年 6 月に人文学部と理学部に改組された 3 年後の、昭和 56(1981)年 10 月 31 日であった。したがって、鴻文会の歴史もすでに 30 余年に及ぶが、それ以前にも、文学科の卒業生を含む「文理学部同窓会」なるものがあった。鴻文会の歴史を語る場合、その前身について触れておかなければならない。

文理学部同窓会は、第 1 回の卒業生が生まれた年の翌昭和 29(1954)年に文理学部長を会長として設立された。規約に従って、その翌年と翌々年には会員名簿が発行され、後者には「会報」も折り込まれ、そこには文理学部の

近況などとともに、旧制山口高等学校同窓会との合流問題が懸案事項として掲載されている。この問題は、その翌昭和 32(1957)年 7 月に発行された文理学部同窓会と旧制山高との合冊会員録においても提起されているが、種々の事情から決着をみなかった。

文理学部同窓会の第 2 回総会は昭和 34(1959)年 5 月に開催され、翌年には、卒業生名簿が、旧制山高創立 40 周年記念事業として発行された旧制山高会員録の巻末に収録されている。さらに昭和 36(1961)年と昭和 40(1965)年(旧制山高合冊)にも卒業生名簿が発行されているが、その後しばらく文理学部同窓会は目立った活動をしていない。これは教養部創設(昭和 41(1966)年)と大学紛争(昭和



元文理学部校舎(後河原)

43(1968)年以降)の影響によるものと思われるが、その10年余り後の昭和51(1976)年3月には、当時学部内に勤務していた卒業生が中心となって、第23回までの卒業生を収録した比較的大部な「山口大学文理学部卒業生名簿」が発行されている。

その後、文理学部同窓会は昭和56(1981)年の鴻文会発足をみて28年の歴史の幕を閉じることになるが、その活動は確かに活発とはいえないものの、そこには旧制山高の精神を引き継ぎつつ、しだいに時代に即した新しい気風を取り入れようとする熱い気概が感じられる。24名の第1回の卒業生、そして、しだいに時代のニーズによってその数を増していき、実質的なその最後となった第29回には105名の卒業生を送り出すことになった文学部、総じてその卒業生は1,839名にのぼる。その多くが今なお、教育界や官公庁のみならず、新聞や放送などのジャーナリズム、実業界などの社会の第一線で華々しく活躍している。文理学部同窓会の歴史を緋とくき、その卒業生の意気高い思いとその活躍のさまが、鴻文会の発足に力強く繋がったことを思わずにはいられない。

こうして、学部改組によって人文学部が誕生したことに即して、昭和56(1981)年10月に文理学部文学部・人文学部を一本化した同窓会「鴻文会」が新たに結成されたわけであるが、その呼称について初代会長の和田敏英氏は、「山口市の由緒ある鴻の峯にちなみ、大鳥のごとく将来雄飛する期待をこめ、さらに旧制山高同窓会「鴻南会」の一字をも継承する」と会報創刊号に記している。山口の地にあって、文理学部同窓会の精神を継承しつつ、新しい人文学部の卒業生を迎え入れて新たな飛躍を模索しようとする同窓会にとって、鴻文会なる命名はまさしく言い得て妙である。新同窓会の結成が満を持しての待ち焦がれた思いであったことは、文理学部同窓会の解散総会後、人文学部講義棟で行われた第1回鴻文会総会に参加した卒業生の高揚した顔つきやうわづった歓声が如実に

表していた。

その結成総会では、渡辺真治人文学部長からご挨拶をいただき、文学部と人文学部の卒業生を正会員、在学生を準会員、現旧教官を特別会員とし、会員相互の親睦と人文学部の発展に寄与することを創設の目的とすること、4年ごとに総会を開催することなどの会則を定め、名誉会長に渡辺学部長を、会長に第1回卒・英米文学の和田敏英氏を、副会長に滝本龍也(第3回卒・社会学)・大塚博久(第4回卒・中国哲学)両氏を選出し(出席者61名)、引き続いて行われた理学部同窓会(鴻理会)との合同の懇親会では、両学部の恩師21名・卒業生147名が旧交を温め、両同窓会の互いの発展を祈ってエールを交換し、新同窓会の出発を祝った。

そして今や、鴻文会も結成後32年目に入った。その歴史のありようについては、発足年の12月創刊以降毎年継続して発行されている会報(第1~17号「鴻文会会報」;第18号~「鴻文」、最新刊第32号)に詳しい。これらには、毎年の収支決算や事業計画、4年に一度の総会や講演会・懇親会、研究室同窓会・同期会の様子、そして学部の教員名や就職状況などの学部情報が掲載されている。しかし、そこで伝えられようとしていることはただ単なるニュースや情報だけではないようだ。遠く山口の地を離れている会員が学生時代や大学を、そして山口を懐かしんで、それらに思いを馳せ、そこになにかの生きる智慧や活力を生み出すことのできるような、会員の人となりの溢れている文章や山大・山口の思い出、山口点描などが盛りだくさんに綴られている。単なる情報伝達だけでなく、同窓会のもつ精神や心までも伝えようとするところに、我が会報の特徴があろう。それらをここで詳らかにすることは困難なので、直に読んでいただくしかない。よって以下、紙幅の関係で、会報の内容を情報ベースで時系列に取り出し、それらを鴻文会の歴史として紹介する。



第2回鴻文会総会

鴻文会結成後の翌昭和 57(1982)年には早くも念願の鴻文会名簿が発行され、会員全員に無料で配布された。また同年 5 月に山東大学との学術交流を促進するための山口大学日中学術交流奨励会が設立され、鴻文会も構成メンバーとして活動することとなった。第 2 回鴻文会総会は昭和 60(1985)年 11 月 2 日、前年 4 月にオープンした山口大学大学会館で開催された。総会議事に先立つ記念講演会では、厚生省人口問題研究所人口政策部長として国際的に活躍中の河野稠果氏(第 1 回卒・社会学)の「人口高齢化を考える」と題するお話を聞き、山大マンドリンクラブのアトラクション演奏、滝本副会長の代理挨拶、名誉会長の八木充人文学部長(第 2 回卒・国史学)の挨拶の後、議事に入り、和田会長、滝本・大塚両副会長を再選した(出席者 45 名)。懇親会では、田中晃先生(元山大学長・文理学部教授)をはじめ恩師の方々からの祝福と励ましのご挨拶をいただいた。なおこの年には、より活発な同窓会活動を願って「鴻文会名簿 1985 年版」が発行された。

昭和 63(1988)年 6 月 16 日、人文学部は創立 10 周年を迎えた。この節目を祝って鴻文会では 2 つの記念行事を行った。中国新聞販売局次長の松浦亮氏(第 6 回卒・英米文学)の「大学と社会」と東海大学留学生教育センター教授の柴田俊造氏(第 4 回卒・国文学)の「日本留学生受入れの経緯と問題点」と題する人文学部大講義室での公開記念講演、そして樹高 4.5m のクスノキの学部前庭での記念植樹である。また翌平成元(1989)年から、旧制山高同窓会「鴻南会」の本部事務局を人文学

部に置き、鴻南会との関係の緊密化を図り、爾後、定期的な協議を行うこととした。なおこの年には、鴻文会発足後 3 冊目の「1989 年版会員名簿」が発行された。

平成元(1989)年 11 月 11 日、大学会館で第 3 回鴻文会総会が開催された。総会に先立ち、元NHK山口放送副局長の重中十士朗氏(第 1 回卒・国史学)の「テレビ報道 35 年一誤報と真実の間で一」と題する公開講演が行われ、和田会長・名誉会長の八木人文学部長の挨拶の後、議事に入り、次期会長に大塚博久氏を、副会長に森田良吉(第 4 回卒・国史学)・有馬正人(第 4 回卒・西洋史学)両氏を選出した。

第 4 回鴻文会総会は、平成 5(1993)年 8 月 17 日大学会館で行われた。大塚会長の挨拶、鴻南会会長の小沢太郎氏の来賓祝辞、名誉会長の山本和之人文学部長の挨拶の後、大塚会長、森田・有馬両副会長を再選した。その後の公開講演会では、鴻南会とのジョイント行事として、パシフィック野球連盟会長の原野和夫氏(鴻南会)の「分水嶺の日本」と題するお話をうかがった。当日は大雨洪水注意報も出たひどい悪天候のため出席者も少なかったが、懇親会には 70 名の出席者を得た。また 11 月には、「会員名簿 1993 年度版」を発行した。

平成 7(1995)年 9 月、念願なって鴻文会は鴻理会と共同で、大学前に連絡事務所を開設した。大塚会長と原田義博鴻理会会長の大きなご尽力のたまものであり、両同窓会の関係や鴻南会との連携が緊密となった。



大学通り 本会事務所は右手ビル 2 階

平成9(1997)年8月23日、大学会館で第5回鴻文会総会が開催された。大塚会長・名誉会長の山本 人文学部長の挨拶の後、会則の改正(終身会費1万円、顧問を置く)などの議事を行い、次期会長に有馬正人氏を、副会長に大野光生(第4回卒・中国哲学)・岡光一浩(第14回卒・ドイツ文学)両氏を選出した。公開記念講演会では、NHK解説委員として司法問題を担当されている松尾龍彦氏(第2回卒・社会学)の「急がれる日本の司法改革—機能低下の司法の現状—」と題するお話を聞いた。また翌年2月には「会員名簿 1997年版」を発行し、人文学部創立20周年を祝って、学部の正面玄関前にクロガネモチを植樹した。なお、平成11(1999)年6月に山口大学は創立50周年を迎えることを機に、廣中平祐学長の発案で各学部同窓会を繋ぐ山口大学同窓会連合会が結成され、鴻文会もその一翼を担うこととなった。

第6回鴻文会総会は、平成13(2001)年8月12日、大学会館で開催された。大野副会長の代理挨拶、名誉会長の田中晋人文学部長(第14回卒・英米文学)の挨拶の後、会長に大野光生氏を、副会長に立川和正(第8回卒・西洋哲学)・添田建治郎(第17回卒・国文学)両氏を選出した(出席者40名)。公開記念講演会と懇親会は鴻理会と同日総会のため共同開催とし、松下孝幸氏(鴻理会)から「人骨から日本人の起源と未来を探る」、廣中平祐山大学長から「山口大学のこれから」と題するお話をうかがい、合同の懇親会では、廣中学長からもご祝辞をいただき、非常に和やかな祝宴となった。また同年度には新たに、山口大学同窓会連合会への参加や山口大学支援財団設立募金への協力、そのことに伴う鴻文会活動の円滑化のための賛助会員制度の創設、個人情報保護のため当面名簿の発行を行わないこと、ホームページの刷新などの運営方針を決めた。

平成17(2005)年8月20日、大学会館で第7回鴻文会総会が開催された。大野会長・

名誉会長の田中誠二人文学部長の挨拶の後、大野会長・立川副会長を再選し、新たに副会長に本田義昭氏(第20回卒・ドイツ語学ドイツ文学)を選出した(出席者40名)。公開記念講演会では、神戸女子大学名誉教授の林田慎之助氏(第5回卒・中国文学)の「寛政異学の禁と二人の儒侠—亀井南冥と亀田鵬斎」と題するお話を聞いた。懇親会は加藤紘山大学長からご祝辞をいただき大いに盛り上がった。なお、翌年には「留学生への奨学金支給」制度を始め、爾後毎年、中国からの大学院人文科学研究科留学生1~3名に奨学金を授与している。また、平成20(2008)年の人文学部創立30周年記念として、翌年5月、学部の中庭に街灯を設置した。

第8回鴻文会総会は、平成21(2009)年8月12日、湯田温泉のホテルニュータナカで第6回同様、鴻理会との合同開催となった。大野会長・名誉会長の湯川洋司人文学部長の挨拶に続いて議事に入り、諸々の案件の承認後、新会長に岡光一浩氏を、副会長に北川健(第8回卒・国史学)・宮藤隆夫(第15回卒・社会学)両氏を選出した(出席者40名)。公開記念講演会では、消費者行政推進会議委員の原早苗氏(第21回卒・社会学)の「消



費者庁・消費者委員会発足が問いかけのもの」と、本田技研工業株式会社副社長の近藤広一氏(鴻理会)の「ホンダのグローバル経営」と題するお話を聞いた。丸本卓哉山大学長はじめ多くの方々のご祝辞をいただき、大盛会の合同の懇親会だった。

なお現役員会は新たに、役員会の活性化、連絡先不明会員の減少、会報「鴻文」の充実、ホームページの刷新、山口大学創基 200 周

年事業への参加、会員相互の親睦と交流の促進のために「研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)同窓会に対する助成」制度の開設などに取り組み、また、平成 23(2011)年発行の第 31 号「鴻文」を鴻文会創立 30 周年号とした。平成 24(2012)年 4 月現在、卒業生数は 7,965 名(文学部 1,839 名、人文学部 5,776 名、大学院・専攻科 350 名)。

2 | 教育学部同窓会(教育学部)

明治 18(1885)年	山口師範学校、女子師範学校同窓会として、亀山同窓会・女子同窓会創立
明治 19(1886)年 7 月	天皇臨幸記念式典を挙げ、記念碑「光被」を建立
明治 36(1903)年 6 月	山口県師範学校校友会設立
大正 元 (1912)年 10 月	山口県師範学校同窓会設立
大正 12(1923)年 10 月	全国師範学校同窓会に加入
昭和 2 (1927)年 4 月	皇太子殿下行啓記念碑「俊徳」を建立
昭和 9 (1934)年 10 月	創立 60 周年記念式典挙行
昭和 24(1949)年	大学昇格のための図書等充実の寄附金募集
昭和 27(1952)年 8 月	大学昇格記念碑「仰徳」を建立
昭和 30(1955)年 10 月 16 日	青年師範同窓会(防府)・山口師範学校同窓会(山口)・室積師範同窓会・室積女子師範同窓会(光)を山口大学教育学部同窓会として改組発足
昭和 37(1962)年	初代会長に二木謙吾氏就任
昭和 37(1962)年 10 月 17 日	「財団法人山口大学教育学部同窓会」として認可
昭和 50(1975)年 10 月	山口県教員養成 100 周年記念祝賀式挙行同記念庭園造築
昭和 52(1977)年 11 月	「校歌」の碑(旧室師・女師)建設
昭和 55(1980)年 10 月	「山口県教学発祥の地」碑建設(旧山師)
昭和 59(1984)年	第二代会長に徳光正亮氏就任
平成 5 (1993)年	第三代会長に岩本肇氏就任
平成 10(1998)年	第四代会長に真田元祐氏就任
平成 13(2001)年 12 月～平成 14(2002)年 2 月	山口大学教育学部存置について、本同窓会外 12 団体が山大学長・山口県知事・山口県議会議員・本県選出国会議員へ要望書を提出
平成 14(2002)年 6 月 15 日	「緊急教育フォーラム」開催「山口大学教育学部の存置を求める会」発足

平成 14(2002)年 7 月 1 日	山口大学教育学部の存置を求める署名活動を展開、15 万人の署名
平成 17(2005)年	文科省が山口大学教育学部の教員養成GP「ちゃぶ台」方式による、「協同型教職研修計画」を採択
平成 20(2008)年 12 月 1 日	「新公益法人制度」施行、「公益法人」か「一般財団法人」かの選択
平成 21(2009)年	第五代会長に藤原董剛氏就任
平成 21(2009)年 6 月 21 日	第 2 回拡大役員会において「一般財団法人」への移行決定
平成 26(2014)年 4 月 10 日	「一般財団法人」として発足

山口大学教育学部同窓会の特色等について、記すにあたり昭和 42 年 7 月 30 日発行の「山大同窓会だより」第 2 号での、二木謙吾会長の言をもって代えたいと思います。(事務局)

同窓のつながりをあたためる

会 長 二木 謙吾

同窓という縁は、不思議なつながりをもってあります。同窓という言葉にふれると、年齢年代のへだたりを越えて、若い日に夢を同じうしたという親わしさが、人の心と心を結びつけてしまいます。

同窓会というつどいは、こうした素朴な心情の中にはぐくまれていく、なつかしい、心あたたまつながりであります。さらにいえば、同窓会は同期同窓であるという濃い縁につながる同輩意識…同じ学窓に若き日の思い出を刻みつけたという親愛感、幾年幾十年たっても色あせることのない同類感…を基底として、先輩・後輩の年代に広いひろがりをもって永久に血の通う大動脈によってつながる血縁的集団ともいうべきであります。

しかも、年齢層の如何を問わずに、その凡てのものが、夢多い学窓時代という時点と環境の中に自分を還元して、お互いのつながりをつけているところに、同窓会という集団の特異性と若やぎがあります。

私どものこの同窓会も、明治十八年に発足した亀山同窓会という名に端を発して、現在の山

口大学教育学部同窓会という名称になるまで、校地校舎のたたずまいも、幾多の変遷を繰り返しました。

また、山口、室積、小郡、防府と教員養成学校も、時代の要請を反映して、複雑な経過をたどってまいりました。

しかし何れにいたしましても、各年代に各学校において、教育の将来に夢をかけて同窓のよしみを結びあったお互いの多くが、さらに教職に携わるという同職のよしみをも通じあって、深い縁を重ねてきたことも、本同窓会の特異のつながりであります。

教育は、国民のひとしく見まもる最大の関心事であり、その道を正すということは社会の最大の課題であります。本同窓会の会員が現在教職にあると否とを別にして、同窓として教育界につないだお互いの縁を大切にあたためあって、ほんとうの教育が育つための「地の塩」となる意欲を新たにするとともに、同窓という親わしいつながりの真義があらうかと存じます。

会員の皆さまのご清福をおいのりします。

「就活」と友の思い出より

昭和 32 年卒 河村 保男
(現 教育学部同窓会関東支部長)



故郷にある大学を出た者の多くは、地元で教員をやりたいと思うのが自然だ。特に私は、小中高そして大学も山口市内であり自宅通学 16 年、両親に寄りかかった生活だった。

親の庇護から脱すべく、蒸気機関車の煤にまみれながら一昼夜かけて、東京の教員採用試験に敢然と挑戦したのだった。運よく一次合格！面接試験に再度上京、これまたラッキー、「桜咲いた」の通知が来た。しかし、都教育界に全く縁もゆかりもなくつてもないのだから、まあいい体験したということで、下関市教委から届いた面接通知、「4 月 6 日に来られたし」とのはがきに感謝し、その日をひたすら待っていた。ところが、東京・葛飾区立の中学校校長から正式採用したいとの朗報が！S.32.3.24 のことだった。下関はどうすべきか？

卒論指導教官濱田清吉先生に相談、玖村敏雄教育学部長先生に連絡して下さった。玖村学部長先生は「こんな例は、私は初めてだ！後輩のためにも行きなさい。下関の方は、なんとかする」と。感謝感激！4 月初めから教職生活は東京の下町でスタートし大田区⇒文京区の中学校に勤務、そして教職生活 38 年目最後は、東大本部の竜岡門前の中学校を任せ無事終えることが出来た。一度も病気で休むことなく、どこに行っても松陰先生から学んだ「至誠・努力」の精神と山口魂で全力を尽くした。そして、悔いのない教職生活を終えたのだ。

大学時代、創部間もない「体操部」で、実力一番の福村(仁保)勤君に、ゼロから教わり、体操の楽しさに目覚め、顧問に佐藤吏先生を

迎え試合に出られるまでになった。お陰で最初に赴任した中学校で体操部をつくり、子供たちに私は、山口弁丸出しで猛特訓、お陰で、運動会で子供たちは、見事な技を披露し喝采を浴びた。大会でも入賞をするようになった。

当時山口市内では、フォークダンスが盛んで、部長の仁保君もすっかり嵌まり込み、部員引き連れ踊りのハシゴをしたものだ。その余韻を、勤務校に持ち込んだ。子供達はもう夢中！になり、帰宅するのを忘れて踊っていた。クラス会をやるとあの頃の話は、これだ。

また、仁保部長はある日から突然マラソンにも燃え、脚力とばねの強化と称して大正通りを小郡までよく走った。ついに体操部として駅伝大会に……着順は？就職するとすぐ、子供たちに呼びかけ早朝駆けっこ会を始めた。勿論私も一緒に走った。そして駅伝チームをつくり区大会に出場、二年目から毎年上位入賞という記録に繋がった。仁保部長に感謝している。いつだったか突然上京し、私の下宿に……。数日泊まり、都内の体操クラブの視察に回っていた。その後、山口県体操界の指導者として活躍したと聞いた。でも彼は、早々と天国に旅立ってしまった。佐藤吏先生が「山口県体操協会 50 年史」を届けて下さり、仁保勤部長がしっかり登揚しておりその足跡が残っていることが嬉しくて堪らないのである。

私は、今、関東に住まいする同窓生と年一回、昔話を語り合っているが、時代格差の大きさに戸惑うばかりだ。大学の場所も移動した。でも、学んだ山口市の空気は相変わらずおいしい。

人生の転機が体研にあった

昭和 53 年卒 和田 康夫
(現 防府市立右田小学校長)



山口大学が平川に移転して間もない昭和 49 年に入学。学生運動の名残が少しばかり残っている正門や教養学部の中庭。整備が完成していない校舎は、殺風景でもあったが、自家用車を研究室のそばまで乗っていける便利さがあった。

2 年生から第 1 希望ではなかった体育研究室に入った。高校時代の一時期、文芸部に所属し、文学青年を気取っていた私は、入学と同時に、国語研究室に顔を出し、「万葉の旅」にも参加していたので、当然のごとく国研と思っていた時があった。しかし、ふたを開ければ体研。それから 1 か月経ったある日、国研の先生から「うちに来ないか。」との誘いがあったのをすぐに断ってしまった。それは、「体育管理学」「運動生理学」などの本をすでに購入していたからという単純な理由だったが、今にして思えば、自分の人生の転機だったような気がする。

3 年生からは、担当の教官が決まる。この時も単純な理由から佐藤勝弘先生の研究室に所属してしまった。当時、体研には、二人の佐藤先生がおられ、「仏の吏^{おさむ}」「鬼の勝^{かつ}」と呼ばれていた。2 年生の時から佐藤吏先生が声をかけてくださり、スポーツ少年団の指導をしていた私の卒論テーマは、「スポーツ少年団の指導者」と決めていた。吏先生は、当時、スポーツ少年団にもかかわられていたので、たくさんの資料をいただいて、卒論に役立ったことは言うまで

もない。

ところが、3 年生になる春休み、佐藤勝弘先生(以下、勝先生)の引っ越しの手伝いに行ったとき、「お前はキザだなあ。でも、話すともうもない。俺の研究室に来ないか。」と誘われ、運命に従った。もちろん吏先生にも大変お世話になったのではあるが、直接指導をしてくださる勝先生の影響も大きかった。

4 年生になると、研究室の鍵を預かり、勝先生よりも早く研究室に行き、部屋の掃除をし、お湯を沸かすことが課せられた。勝先生の出勤にあわせてお茶が出ないと叱られる。学問の前に、人として、そして、社会人としての生き方を体験的に学ばせていただいたのである。

先生の家が近かったこともあり、常に先生の家に入り浸っていた。クリスマスも元旦も。夫婦それぞれの愚痴をよく聞かされるほど…。それにしても、できの悪い私の面倒をよく見てくださったものだ。40 年経った今も、時折電話をしたり、新潟まで遊びに行ったり、数年に一度はお会いしているが、今でも、当時のままの気分でつきあっていただける、生涯の恩師である。

山口大学での 4 年間は、仲間にも恵まれ実に愉快だった。教員生活も後 2 年。勝先生を超えることはできなかったが、アグレッシブさだけは引き継いだつもりである。思い出は尽きない。

山口大学と共に

昭和 59 年卒 久保田 尚
(元 山口大学教育学部准教授)
(現 美祢市立嘉万小学校長)



山口大学を卒業後、長らく公立小学校等で教員を務めておりましたが、今は母校山口大学教育学部で教員志望の学生たちに、現場で経験してきたことを織り交ぜながら、教職関係の授業を行っております。全国の大学でもそれぞれの特色を生かしながら、現場の教員を大学に迎え入れる「交流人事制度」を行っているところがたくさんあります。あまり知られていないこの制度について、最初に少しお話ししてみたいと思います。

山口県では、平成 17 年 12 月、山口大学教育学部と山口県教育委員会、山口市教育委員会が教育研究、教員養成や教員研修等について包括的連携を図るため、「山口大学教育学部・山口県教育委員会、山口市教育委員会の教育連携推進協議会要綱」を定め、「教育連携推進協議会」を設置しました。この協議会での取組の一つとして「交流人事教員派遣」が検討され、平成 18 年度より開始されました。

「交流人事教員」は、原則的に、公立小・中学校教頭のうち県教委経験者(派遣指導主事・社会教育主事を含む)から期限 3 年で採用され、教育学部附属教育実践総合センターに配属されています。ちなみに私は、県教委等の経験は全くなく異例の採用のようです。

平成 18 年度から 2 年間は、中学校籍の先生お一人でしたが、平成 20 年度より小学校籍の先生も加わり二人体制となりました。初代の

小学校籍の先生の任期が切れたあと平成 23 年度から二代目として配属されたのが私です。

これまで小学校教員として教育に携わってききましたが、相手が一気に大学生となり、着任早々、戸惑いは隠せませんでした。しかし、「教員になる」という明確な目標をもった学生たち相手に自分の経験を踏まえて教職を語るということは、教えることの手応えを感じつつ、自分のこれまでの取組を振り返るいい機会にもなっています。

現在、教員の資質能力向上が叫ばれる中、教員養成段階から実践的指導力の育成強化が求められています。また、大学と教育委員会との連携・協働も重要視されてきています。そのような中、我々「交流人事教員」が果たす役割は決して小さくありません。申し渡された任期はあとわずかですが、少しでもお役に立てるように微力ながら力を尽くしていきたいと思っております。

山口大学とのかかわりとしては、中学生時代に附属光中学校でお世話になり、大学時代はもちろん山口大学教育学部で学び、現場に出てからも平成 8 年から 5 年間附属山口小学校で勤務しました。そして今回は、創基 200 周年を迎えようとするこの時期にまさかの本学勤務と、山口大学との縁の深さを感じずにはおれません。この縁を大切に大学のますますの発展を祈念しつつ、自分もしっかり成長していきたいと意を新たにしています。

東日本大震災と学徒動員

昭和 23 年山口師範卒 伊藤 美代子
(現 教育学部同窓会評議員)



3.11 東日本大震災の被災地、宮城県のSさんから「被災地へ生活用品を送ってほしい。」との連絡が入った。未曾有の大災害に対して、何か手助けできないかと、思案していた時だった。私はとるものもとらずにSさんのもとを訪ねる決心をして、被災地へ飛びたった。

Sさんとの出会いは、30 年前の中学校長会の全国大会の時だった。会場内どこを見渡しても、男性校長がほとんどのなか、「あなたは中国地区で一人ですね。私も東北で最初の一人です。」とにこやかに声をかけてくださった時からの親交だった。

S夫妻の車で案内された、南相馬から宮城まで、家も人かげもない荒涼とした、まさにゴーストタウンの情景を目の当たりにして、私は胸の張り裂ける思いで言葉を失った。閉上中学校では卒業式の後、希望に燃えて巣立った生徒の何人かは校舎を離れていて津波の犠牲になったことを涙ながらに語るSさんの姿に私ももらい泣きした。三階校舎の大時計は2時45分で止まったままだった。

山口へ帰ってから、友人・知己へ声かけをして、生活用品・学用品等を被災地へ届けることに奔走の数ヶ月を過ごした。

あの、自然の猛威の前で、人間の生と死を分けたものは一体何だったのだろうか。ふと私の心に、16歳の8月7日の出来事が鮮やかに蘇ってきた。

“学生もペンと銃に・ハンマーに”のかけ声のもと、「学徒動員令」の発布により全国の学生が戦場や工場に出ていった。

山口師範学校女子部の本科生と私たちは、名古屋の三菱重工の航空機製作所で働くことになったが、連夜のB29の爆撃で寄宿舍・工場

も破壊され、命からがら富山の疎開工場に移動した。そこは、戦闘機の組み立て工場で、私たちは熟練工の手伝いとして、翼と胴体を繋ぐ仕事をさせられた。

昭和 20(1945)年 8 月 5 日、私たち 40 名に「学校に帰れ」との突然の命令が出された。私たちは山口へ帰ることができることを喜び合ったが、戦時中のこと、何がどうなったのかわからないが、5日の出発が6日に日延べになってしまった。6日に富山を出発して、夕刻大阪で乗り替えた途端、「今朝、新型爆弾の投下で広島市内は全滅、この列車は終着駅不明」との知らせがあった。

8月7日、私たちは海田市駅で降ろされた。ホームは何の変哲もなかったが、待合室に一步足を踏み入れて息をのんだ。赤黒く焦げた顔や手足、ボロボロに焼け衣服をまとい助けを呼ぶかすかな声、この世の地獄にただ呆然と立ちつくした。私たちは言葉もなく山口をめざした。市内に入ると足の踏み場もない、半死半生の人々、阿鼻叫喚とはこのことかと胸の張り裂ける思いがした。私たちは倒れた人や貨車を避け、灼熱の太陽の照りつけるなか這うようにして幾つもの鉄橋を渡り、富山を出て3日目やっとの思いで、それぞれの我が家へたどり着いた。

もし、私たちの出発が6日に日延べになっていなかったら、私たちは原爆投下の日に広島に入っていただろう。そうだとすると…。

私たちはこれまで、かけがえのない尊い多くの命を失ってきた。その多くの命を受け継いで、今私がここに生かされている。尊い命を犠牲にしたり、豊かな自然を破壊したりすることを防ぐために、人間の叡智を結集したいものである。

3 | 鳳陽会(経済学部)

明治 41(1908)年	山口高等商業学校同窓会発足
昭和 2(1927)年	「鳳陽会」に改称
昭和 5(1930)年	社団法人として発足
昭和 24(1949)年	新制大学の発足とともに経済学部の同窓会として継続
昭和 54(1979)年	同窓会館「鳳陽館」設置 「上田鳳陽」資料館併設
平成 17(2005)年	経済学部創立百周年記念式典に参加
平成 20(2008)年	「鳳陽会創立百周年祝賀会」開催
平成 25(2013)年	一般社団法人に移行

同窓会・鳳陽会の歩み

鳳陽会事務局長 山本 文雄

1. 沿革

明治 41(1908)年 3 月、山口大学経済学部の前身山口高等商業学校第 1 回卒業式が挙行されるにあたって、「山口高等商業学校同窓会」が設立された。昭和 2(1927)年 1 月、同窓会は、山口の地(中河原)に私塾「山口講堂」を創設された幕末の萩藩士「上田鳳陽先生」にちなんで、「鳳陽会」に改称された。ついで、昭和 5(1930)年 11 月、評議会にて「社団法人鳳陽会」に改めることが決議され、文部大臣の許可を得て、社団法人化されている。

山口高商は昭和 19(1944)年 4 月 1 日に「山口経済専門学校」と改称され、昭和 24(1949)年 5 月 31 日に新制山口大学の発足と共に「鳳陽会」も経済学部の同窓会として引き継がれた。

昭和 48(1973)年 3 月に大学の統合移転の一環で経済学部も吉田地区に移転していったが、昭和 54(1979)年 4 月に母校所在地跡の亀山公園東麓(山口市亀山町)に同窓会館「鳳陽館」が建設され本部事務局とし、併せて「上田鳳陽」資料館も併設された。平成 9(1997)年には、「山都逍遙歌」、平成 14(2002)

年には、「山口高等商業学校校歌」の歌碑がそれぞれ経済学部玄関前に建立されている。

平成 17(2005)年 2 月 24 日に山口大学経済学部は、山口高等商業学校が明治 38(1905)年に創立以来、百周年を迎えた。これに関する記念事業として 5 月 28 日に関係者多数が出席し、経済学部玄関横に「鳳陽寮歌」石碑の建立除幕式が行われた。また 6 月 17 日から 19 日にかけて「創立百周年記念式典」他関連事業が行われ、多数の会員が出席した。

平成 20(2008)年 3 月 27 日「鳳陽会」は、「山口高等商業学校同窓会」設立以来百周年を迎える事になり、9 月 25 日に「鳳陽会創立百周年祝賀会」が開催された。

平成 25(2013)年 4 月 1 日には、公益法人制度改革への対応として、一般社団法人に移行した。

2. 組織・支部

「鳳陽会」は、現在本部事務局を山口市亀山の一角にある同窓会館「鳳陽館」に置いている。会員は、旧高商以来の卒業生から構成さ

れており現状約 18,000 人を擁している。支部に関して、戦前は海外支部も 10 指を数えていた。現在は国内に 40 支部がある。

3. 活動状況

「通常総会」

毎年 6 月に通常総会を全国 7 支部(東京、山口等…)の持ち回りで開催しており、全国から各支部の会員が出席している。事業、予算等の審議、承認等を行い、総会後には懇親会を実施し会員相互の親睦を深めている。

「事業活動」

毎年度具体的な事業活動を計画し、実施してきているが、最近の主要な活動実績を述べると、以下のとおりである。

1. 教育支援事業(母校、地域、学部生への支援)

若い世代の同窓会離れ等に対応し、また学部における教育支援に特に力を入れている。

① 寄附講座(特殊講義)の開設

平成 22 年度よりスタートさせ、毎年 4 月～7 月の毎週金曜日に卒業生計 15 名を派遣し、実学を主体にした講義を行っており、聴講学生は毎回約 300 名を数えている。

② 就職活動支援

厳しい就職氷河期に対応する為、「同窓

会」の人脈、各支部のネットワーク等をフルに活用して学生達の就職活動支援を行っている。学部との連携で、平成 23 年度より会員による就職アドバイザー制度の実施、平成 24 年度から模擬面接を実施している。

③ 学部における各種表彰及び海外留学等への助成、支援

公認会計士、税理士試験合格者の表彰及び海外留学等への支援及び助成を行っている。

2. 「鳳陽会」会報事業

同窓会活動の広報事業にも力を入れており、現在、年 3 回機関紙「鳳陽」を発行し、全国の会員はもとより、海外会員、大学本部、学部の教職員、学生、更には、他学部及び関連大学同窓会にも配布している。

3. その他事業

その他の重点事業として、各支部との連携強化等の同窓会関係事業及び学部生、その保護者並びに、他学部、他大学等との積極的交流事業を行っている。

「支部活動」

各支部における総会の開催他、若い会員との交流会、俳句、囲碁の会の実施、ゴルフコンペの開催、留学生との交流会等色々な活動を行っている。



亀山時代の校舎



亀山校舎跡地の察歌碑



同窓会館「鳳陽館」

山口高商の思出

旧制山口高商昭和8年卒 片山 正美

山口高商に入学したのは昭和5年(1930年)の春4月である。省線(国鉄の前身)山口駅貧相な木造平屋の駅舎、これが県庁所在地の駅? 向うの小高い丘(亀山)まで道が伸びている。突き当たりに学校らしき建物(旧師範学校)が見える。偶に荷馬車・大八車が通る。あまり人通りは無い。これから3年間御厄介に為る街だ。大きく息を吸い込む。

「諸君は今日から山口高商の学生のジェントルマンである。社会に己に責任を持ち決して他に迷惑を掛けない自覚を持て。最早生徒でなく生徒手帳も無い。ジェントルマンの自覚を持てばどんな事をしても構わない自由である」鷺尾健治校長講義第一声である。ヨーシ責任さえ自覚すれば何をやっても自由だ、酒も飲めるし煙草も吸える。生徒手帳で固く縛られていたのが一度に解放され、大空に向かって両手を挙げた。此の時の解放感は生涯忘れることはない。あの頃は未成年者の飲酒喫煙には大らかであった。学生には未成年者もいたが誰も気にする者はいない。満20歳になると日本の男子は全て徴兵検査を受けなければならない。此れが済むと初めて一人前の男子と認められ飲酒喫煙も大っぴらに出来た。

授業の思い出。英語名物教授今泉浦次郎教授、日本で最初に英文学を紹介した厨川白村の弟子が自慢、風采構わず何時も草履か雪駄履き、教材はスティブソン著の原書、指名した学生に「○頁を読んで其の大意を説明せよ」、と言った具合。今一人の奈倉次郎教授アメリカか何処かの新聞等のコラムを集めた厚さ4cm程の本の任意の頁を暗記させ、当日指名された学生が暗記して来た頁を淀み無く弁ずれ

ば「よ〜し」。途中で行き詰まり続かぬとまた次に。此のレシテーションは文章の暗記を継続すれば幾つかのフレーズが身に就くという狙いらしいが、教室を出た途端綺麗に忘れ身に就くどころか。これ等の授業は中学で基礎英語が出来ている事を前提にしている。東京・神戸商大のような予科は無くともせめて1年生の前期位は今一度基礎固めの時間が欲しいと当時思った。

英語では無いが3年生の初め、活きのいい丸坊主の若い講師がお目見えした。京大の本位田教授の愛弟子で、初めての教壇が我々の教室。歳は我々より5〜6歳ぐらい上か。経済史担当。講義明快歯切れ良し、竹中靖一講師である。後年戦後昭和39年奇しくも再会を歓び合う。既に先生は近畿大学教授・経済学博士、著書『石門心学の経済思想』は学士院賞を受賞、錚々たる学者であった。其の著書を頂戴する。石田梅岩の思想は後年会社経営に当たり重要な指針となった。後に東京商大で経営学学会の権威と為られた古川栄一教授の名講義も忘れられない。

昭和7年高商3年の時五・一五事件、海軍青年将校がクーデターを起こして犬養首相を射殺した。高商への配属将校が3年生全員に感想を書かせた。学生の感想は「法治国家のわが国に於いて武器をもった青年将校が問答無用と徒手空拳の首相を射殺した暴挙許し難い」と全員異口同音に書いた。流石高商の学生である。良識は健在であった。配属将校は、学生達は青年将校の行為を同じ青年として賛美するとでも思ったのか、全く予想を裏切られたか、烈火の如く怒り意味不明の言葉をまくし立てた。前年昭和6年柳条溝事件を発端とし満洲



筆者の卒業写真
(山口高等商業学校卒業記念帖より)

事変を経て後の第二次世界大戦へと続く時代の流れは、軍部も未だ先の事を予想して居らず、国民は殆ど知らされず、世間も学園も表面的には平穏であった。

古賀政男作曲、藤山一郎歌う「酒は涙か溜息か」「丘を越えて」明大マンドリン部の伴奏で大ヒット、高商のマンドリン部も演奏会でメインに大受け。其の頃山口には娯楽は映画館二つ芝居小屋一つだけ。音楽家・芸術家は適当なホール、会場がない為来演は無かった。それだけ高商の定期演奏会は一般市民の楽しい年中行事であった。家族連れや若い娘さん達の参加出演もあり、皆着飾って学生の注目を集めようと競った。同級で組は違ったが塚田次夫君が小さい頃からバイオリンを習い演奏会の花形。高商マンにも芸術家が居た。

山口は学生の街、高商・高校・師範の学生の消費は市の経済的波及効果は大きかった。市民も「学生さん。学生さん。」と皆親切に心温まる接し方をしてくれた。特に高商の学生は未来の社長さん候補と、高校より手近な夢と希望を託して呉れていたのである。



山口高商弓道部(左上に幹事であった筆者の弓を引く姿が見える。)

弓道部。高商3年間の生活は下宿・教室・弓道場、此の三角形を毎日々繰り返し行動して居たに尽きる。市中の近郊の散策、鳳凰山登山、長門峡・秋芳洞観光等一切無し。辛うじて3年卒業直前秋芳洞へ日帰りをしただけ。従って山口近辺の事情は殆ど知る事が無い。

山口高商弓道部は昭和6年、明治神宮、大学高専弓道大会に見事全国制覇を成し遂げた。当時は大学及び高専対象の弓道全国大会は明治神宮のこれしかなかった。大会有史以来、優勝弓が初めて箱根の山を越えた、と東都大学連中が悔しがった。

去る平成24年6月7日経済学部での講演の折り山大弓道部道場を訪れた。神棚に拝礼して、正面の安土に一礼した瞬間、80年前の旧亀山道場の安土が眼前に広がる。当時幹事として、部の運営、後輩への厳しい指導に明け暮れ身も心も弓道部に打ち込んだ。合宿から道場への行き帰りに詠う部歌が柔道部・剣道部に有るのに弓道部には無いのを淋しく思い部歌を作詞した。作曲は同級生の久野四郎君である。マンドリンの名手。父君は関門汽船の社長、関門トンネル・関門大橋は未だ無い。専ら此の会社の連絡船に頼る。卒業以来今日まで80年間種々の事情で全く弓に触れることなく過ごした。同期の亡くなった字部の森本耐輔君はずっと弓を引き続け錬士にまでなった。

山口高商の弓道部の伝統は正しい精神と姿勢で放てば必ず的中、外れた時は心と姿勢に乱れが有る。当時競技用の的中主義を採る大学高専も有ったが誠に品が無い。我々はかたくなに本来の弓道を守り伝統とした。明治神宮で見事に実証された。的を見つめる眼、矢を放つ境地、道場での立ち居振る舞い、すべてのマナーがその後の人生の基幹となった。弓道場は今も尚心の拠り所である。

(平成24年10月満百歳6カ月記す)

「往時をしのんで」

経済学部昭和40年卒 淵上 洋一

私は^{よわい}年齢七十を過ぎ、人生の^{たそがれ}黄昏を感じ始めている昨今であるが、思い返してみると、大学生活や実社会での勤め人としての暮し、そして結婚や子育て等の家庭人としての営み、総ての面において、いかに時代の恩恵に浴していたか、今さらながらしみじみとその有難さに感謝するものである。

とりわけ大学生活の時期は、我が国が敗戦の^{いたで}痛手から漸く立ち直り、高度経済成長を遂げている折で、世相も明るくなり、古い衣を脱ぎすてて、新しい服を求め始めた様な^{おもむき}趣を呈していた。精神的にも物質的にも、前に向かって力強く歩を^ふ踏み出す、その様な時代であった。

昭和三十六年四月初め、福岡県中東部の小都市に住んでいた私は、高校を^お卒え、親代りの叔父に認められていた国立大学二校受験を済ませたものの、その一校はしくじり、二校目の山口大学経済学部の合否が不明で、^{うつうつ}鬱々として楽しまず、これから先の事を^{おもんばか}慮って暗澹とした思いに捉われていた。

ところが四月六日、新聞に山口大学合格の報が掲載されると、叔父が、この大学は実学教育に^{かっかく}赫々たる成果を挙げていること、高等教育機関として相当の歴史を有していること、そして何よりも一人の合格者の蔭で十人余りの同年代の青年の涙が流されていることを^つ言い募って入学することを強く勧めてくれた。

それで早速、手続きを済ませ、山口に行くことにしたが、駅に見送りに来た叔母が心配そうな面持ちで、「気持ちを強くもって生活すること」「酒に呑まれないこと」この二点を強調したことを、いまでも鮮やかに思い出す。

その日の夕刻、暮れなずむ山口駅に辿り着き、足に^{なじま}馴染ぬ新しい革靴をひきずりながら、これからの生活の場となる鳳陽寮へと向ったのである。

期待と不安の入り混じった気持ちで始まった大学生活、^{なかんずく}就中、鳳陽寮での暮しは、多少の不便はあったものの、実に快適であった。五つの分寮(南寮・北寮等)で形成されるその寮は、完全に学生の自治に^{ゆだ}委ねられ、執行機関の長である寮総務を選挙により選び、大学当局の若干の指導は受けながらも、あくまで寮生による自治運営が基本であった。

まさしく“同じ釜のめしをくう”とはこの事で、食事や入浴という日常行動を同じくし、コンパやストーム、それに共同部屋という特殊環境による間断なき接触を重ねる日々で、友情とも、親情とも、或いは恋情ともつかぬ^{めば}気持ちが、自然発生的に芽生えてきたのだった。

この様に充実した寮生活、それに加えて決して高いとはいえないレベルのクラブ活動、教師が理念と情熱をもって^{とくれい}督励これ努めたゼミナール。これ等の諸活動を通じて得られた友は、終生のつきあいになるのである。

鳳陽寮での暮らしの中で、四六時中、行を共にしたK。寮を出たあと彼が入居した中市の梅田下宿にも連日^{びた}入り浸り、自分の方があたかも下宿人の如く振舞ったものである。そのKは繊維商社に^{るいしん}勤め累進。

入学後、次第に^{たいだ}怠惰に流れ易きにつく私を毅然と^{きぜん}諭してくれたI君。学問を求め、卒業後

はマルクス経済学の牙城といわれた京都の大学院に進み、やがて学究の道へ。二十数年経ち、少壮学者の輝きに満ちた彼から、再び説かれた東欧経済の考察。昔通りの切味。^{きれあじ}

温容な風貌^{ふうぼう}で学生の頃より大人^{たいじん}の風格の備わっていたS氏。鉄鋼メーカーの大組織の中で悠揚^{ゆうよう}迫らぬ風を貫いたことは我等友の誇り。

ラグビー部の猛者^{もさ}として精悍^{せいかん}な面構えのH君。天神通りにある洒落たバーに足繫く通っていた頃、憎からず思っていた女の子に「Hさんて本当に素敵。是非紹介して」と頼まれた時は大いに落胆した。後に、食品会社において経営陣の一角に。

文武両道で才氣^{うた}を謳^{うた}われたY君。創業経営者が猛烈^{もっせんすいはん}に率先垂範する某自動車会社に入社して大活躍。それを退^おえると、大学院で再び学問を志し、今では大学講師の要職に。

これ等の友を思うとき、よき時代、よき大学で過ごした事^{こと}を殊更に実感するのである。

そして、景色としての心象風景はどのようなものであったろうか。

春のうららかな日差しを浴びて、一の坂川畔の桜をめ度ながら、後河原から香山園を抜け、瑠璃光寺へ至る道を散策したことがあったが、今もってあのゆったりとした気分は忘れられない。木々の間からは、ひばりの啼き声がきこえ、たんぽには一面、れんげの花が咲きほこっていた鮮やかな風景……。目をつぶれば今でも、はっきりとよみがえる。

冬の寒気厳しき頃、気のおけない親しい友と道場門前辺りの安酒場で、しこたま酒を呑み、ふらつく足どりで、左手にザビエルの塔、学部校舎を見やりながら、長山のだらだら坂を歩いて鳳陽寮へ帰った事もあった。

心ときめく情景である。

私は、社会の第一線での働きを終えたいま、若き頃の思い出が凝縮されている山口の地で老いを養うことにした。

蒼き日と枯れた日を、この地で過ごせるのは望外の喜びといってよく、まさに暮れなんとする夕べ、遥^{はる}か彼方^{かなた}に鳳^{やまなみ}陽^{なみ}の山脈をながめながら、一掬の酒を汲む幸せを感じるのである。



鳳陽寮入寮記念写真(昭和37年4月)前列中央 学部長 水田金一教授
前列右から5人目が寮総務の古賀邦男氏、前列左から5人目が筆者(北寮々長)

美しき山都の青春

経済学部昭和 50 年卒 塩塚 保
(産経新聞社記者)

18 歳の早春だった。

1970 年 3 月、わたしは国鉄小郡駅 0 番ホームから列車に乗り込んだ。3 両編成の列車はとどこ走る。山口駅に到着した。山口大学経済学部(亀山校舎)をめざして歩いていく。明日は入学試験である。

早間田交差点を渡った。突如、天上から美しい鐘の音が降り注いできた。見上げる。緑の丘の上。美しく白い塔がすくくと建っていた。ザビエル教会。正午の時を告げているのか。祝福されたかのような気が満ちてきた。

山口大学経済学部の正門に立った。格調高い本館が眼前に迫る。天下の 3 高商、山口高商の伝統を実感した。隣には歴史を刻む講堂が建っていた。屋根の中央部から、にゅっとそびえる塔が印象的だ。

一方、広場には、激しい政治スローガンを書きなぐった立て看板が林立する。白、赤、銀、青、黒。様々な色のヘルメットをかぶった学生たちが政治集会を開いていた。1970 年は日米安保闘争決戦の年。首都から遠く離れた山口大学も騒然としていた。

4 月、鳳陽寮に入寮した。鳳陽寮は亀山校舎の向かいに建っていた。どっしりとした木造の

寮。歴史と風格を感じさせる。さらに驚いたことに旧制高校時代のバンカラの気風が色濃く残っていた。

鳳陽寮は、北寮、南寮、西寮、西北寮、そして中寮—計 5 寮で構成されていた。わたしの部屋は北寮の 2 階。N 先輩と同室だった。N 先輩は松江出身。寮生活の作法や山登り、酒の飲み方などを教えてもらった。

新入生歓迎コンパが寮の一室で行われた。鳳陽寮では、主に飲む酒が決まっているという。南寮はビール、中寮は洋酒、西北寮は焼酎、そしてわが北寮は日本酒(ひや酒)である。一升瓶の封を切り、茶碗でぐいぐいやる。宴が盛り上がりてきたころ、先輩が寮歌をしてくれた。まず北寮寮歌。次に山都逍遙歌。そして鳳陽寮寮歌。寮歌は肩を組んで歌うものだ。いいしれぬ高揚、連帯感。伝統の寮歌を受け継ぐ幸せを感じた。

各寮はストームでも張り合う。寮ごとに独特の流儀があった。西寮はパンツストーム。西北寮は裸ストームだ。深夜、真っ裸で寮の廊下を駆けまわる。寮生はバケツの水をぶっかけて手荒く歓迎した。

講義は古びた木造校舎で行われた。教室には、だるまストーブがあった。寒い日。学生が新聞紙に火をつけ、石炭をくべて暖をとった。

教授は学生の自主性を重んじた。講義の出欠など気にしない。前期、後期の試験(論文形式)でそれなりの論文を提出すれば、それなりの評価をもらった。教授は亀山周辺に点在するしゃれた洋風官舎に住んでいた。学生は夜中でも休日でも教授宅を訪問した。濃密な師弟関係が実在していたと思う。



黒い学生服を着て勢揃いした鳳陽寮の北寮生たち(1971 年撮影)

山都・山口の春。一の坂川。河畔の桜が見事に咲いた。惣野(そうの)旅館でコンパ。したたかに酔い、後河原を逍遥する。下駄を鳴らして寮歌を歌う。5月末、漆黒の闇にホテルが乱舞した。ああ、美しかった。

夏。ワンダーフォーゲル部の合宿が南アルプスで行われた。めざすは北岳(標高 3,193 メートル)。リュックの重量は 20 キロを超す。重い。肩に食い込む。あえぎながら、険路を 1 歩、1 歩登っていく。ついに北岳のてっぺんに立った。日本第 2 の高峰を制覇した。あの達成感。白い残雪をすくい、練乳をかけて食べた。山頂の味、いまでも思い出す。

秋。大学祭の季節だ。ロックミュージカル「ヘアー」を、亀山講堂で上演することにした。舞台に立つ役者。照明や音響、大道具、衣装などのスタッフ。そしてロックバンド。全部、学生でやる。

公演当日。会場は満席となった。さあ、開幕だ。舞台の上で演じ、歌い、踊る。反戦、そして自由を訴えた。芝居完了。拍手が沸き起こる。声援にこたえてロックバンドが、大音量で演奏再開。観客は総立ちとなった。役者が舞台から飛び降りる。観客と一体化して歌い、踊る。歌い、踊る。亀山講堂は、若々しい熱気に満ち満ちていった。

冬。部屋で寝ていた。早朝、南寮の E 君からたたき起こされた。「塩塚、起きろ。雪が降っているぞ」。カメラを持って、瑠璃光寺に向かった。一番乗りだった。まっさらな白い、白い雪。雪化粧した五重塔が、新鮮な朝の陽光を浴び、輝いている。神々しいほど美しかった。

1973 年、吉田移転。亀山校舎に別れを告げる日が迫ってくる。本館と講堂は破壊されるという。ところが、わたしはなにもしなかった。

いま、痛切に思う。保存運動を展開すべきだった。格調高い本館と講堂だけは、後世に残すべきだったのだ。

さて、わが鳳陽寮も大学当局から廃寮を宣告された。寮祭が敢行された。祭りの準備。一の坂川近くの造り酒屋に押しかけ、空き樽を担いで帰る。樽 4 個をピラミッド状に重ねる。

太い荒縄で樽を縛りあげる。青い笹を飾りつけ、樽みこしが完成した。

寮祭開幕。寮生たちが樽みこしを担ぎ、門を出る。「わっしょい。わっしょい」。道場門前に繰り出していく。市民があたたかく迎えてくれた。沿道から大きな拍手が沸き起こった。あの時代、学生は確かに山口市民から愛されていた。



山口大学ワンダーフォーゲル部は南アルプスで夏合宿を行った。

寮祭最後の夜。寮生たちが広場に続々と集結してきた。さあ、ファイアーストームが始まる。たき火に点火。赤く、高々とした火柱が夜空を焦がす。



山口高商時代の伝統を受け継ぐ鳳陽寮の寮祭で盛り上がる寮生たち

肩を組む。次々に寮歌を歌っていく。最後の寮歌は、山都逍遥歌。鳳陽寮の終焉を惜しみ、万感こめて歌う。若々しい歌声は、黒々とした亀山の森、そして鴻の峰に響き渡っていった。

へ消えゆく鐘に目覚めれば

弦月白し鴻の峰

弦月白し鴻の峰…。

(了)

4 | 鴻理会(理学部)

昭和 56(1981)年	理学部同窓会発足 初代会長に脇坂宣尚氏(生物)就任 会長任期5年
平成 7(1995)年	鴻文会(人文学部同窓会)と共同で学外に理学部同窓会事務所設置
平成 8(1996)年	理学部同窓会を「鴻理会(山口大学理学部同窓会)」に改称
平成 10(1998)年	鴻理会の現役学生支援活動開始
平成 13(2001)年	鴻文会と合同で同窓会(懇親会)を開催
平成 18(2006)年	会長任期を3年に改定
平成 19(2007)年	鴻理会の母校支援事業強化
平成 21(2009)年	鴻文会と合同で同窓会(懇親会)を開催
平成 23(2011)年	鴻理会30周年記念事業



2012年度鴻理会総会



理学部中庭に設置されたLED街灯



理学部玄関ホールに設置された電子掲示板

鴻理会設立から三十年余の今、「母校支援事業」

鴻理会 常任幹事 野崎 浩二

鴻理会(山口大学理学部同窓会)の設立以来、30年余りの年月が経過した。この間、鴻理会を取り巻く環境は山口大学の変遷とともに大きく変化してきた。それに伴って鴻理会の役割も、同窓生同士の親睦のみならず、母校支援事業等が加わり多様化してきた。特に、2004年の国立大学の法人化を機に鴻理会の幹事会で母校支援事業の充実の必要性が議論され始めた。その後、第六代庫本正会長就任時の鴻理会総会では母校支援事業を積極的に行うこととなった。

山口大学の他の学部同窓会や他の大学の同窓会でもさまざまな母校支援事業を展開している。鴻理会では、「理学部の学術活動補助」と「理学部の学生支援活動補助」の2つの母校支援事業を同窓会の規模に似合ったやり方で実施してきた。

○理学部の学術活動補助

鴻理会が行っている理学部の学術活動補助は、毎年恒例となっている理学部の市民公開行事「サイエンスワールドへの助成」、理学部教員の主催する「研究会等の開催補助」、「理学部ハイライト研究への助成」の3つである。

サイエンスワールドは科学の面白さを一般市民に紹介する毎年の行事であり、現在では山口市民に認知された恒例の行事になっている。その企画は、学生自らが計画、準備、実施し

ている。鴻理会では開催経費の一部を助成している。

理学部ハイライト研究は、理学部を広くアピールできるような研究プロジェクトを理学部が認定し支援するもので、鴻理会から研究費の一部を助成している。最初のハイライト研究は「自然遺産秋吉台のカルスト台地と石灰洞の科学」をテーマにした研究プロジェクトであった。プロジェクトには、鴻理会の会員4名が参加した。



理学部ハイライト研究報告書(左)と研究成果報告記者会見のようす

○理学部の学生支援活動補助

理学部の学生支援活動補助は、学生を国際会議等で海外に派遣するための「学生の海外派遣助成」、学生の国内での学会発表を支援する「学生の学会等派遣助成」、そして学生の就職活動を支援する「理学部OBとの就職座談会」である。

学生の海外派遣助成は毎年2名程度に対して旅費の一部を補助している。最近は申請者が増加傾向にある。学生の学会等派遣助成は、毎年20名程度の学生に旅費の一部を補助してきた。最近は理学部からの旅費の手当てが充実してきたため、申請者は減少傾向である。

理学部OBとの就職座談会は毎年6名の会員(OB)が、学生に対して仕事をする、企業、業界について情報提供するとともに就職活動のアドバイス等を行う行事である。理学部と共催で開催している。毎年百名近い学生が参加しているが、学生からは好評を得ている行事である。



毎年開催される「山口大学理学部サイエンスワールド」
鴻理会が毎年開催経費の一部助成し、開催を支援している。



理学部OBとの就職座談会
講師は鴻理会会員である卒業生

以上のように母校支援事業は現在では鴻理会の事業の一つの柱となった。鴻理会の目的は「会員の親睦を図り、併せて山口大学理学部及び関連する大学院研究科(理工学、医学系)の発展に寄与すること」である。鴻理会発足30年余が経過した今、後者の目的がようやく具体的な形となってきた。一方で、同窓会の本来の目的である「会員同士の親睦」のための事業の充実にも努めている。最近では、会員同士が開催する同窓会を積極的に支援する取り組みを行っている。

山口大学が国立大学法人となって10年が経過しようとしている今、同窓会の役割が大学にとっても重要となっているように思われる。今後も母校山口大学のために、さまざまな事業の可能性を模索しながら、可能な限り協力していきたい。

5 | 霜仁会(医学部医学科)

昭和 27(1952)年	第1回同窓会総会開催 初代会長に山口県立医科大学学長松本彰氏が就任
昭和 29(1954)年	医学部同窓会「霜仁会」発足
昭和 37(1962)年	霜仁会会報を発行
昭和 55(1980)年	公益社団法人に移行
昭和 56(1981)年	霜仁会検査センター設立
平成 9(1997)年	霜仁会館(創立50周年記念会館)竣工
平成 20(2008)年	霜仁会医学交流会館設置
平成 25(2013)年	一般社団法人に移行

医学部(医学科)同窓会—霜仁会のあゆみ

霜仁会会長 福本 陽平

1) 霜仁会の設立と沿革

医学部(医学科)の同窓会である霜仁会は、現在、本部・事務局を宇部市南小串1丁目2-11にある霜仁会医学交流会館に置き、全国に33ヶ所の支部を有しています。今では、会員数が5,600名を越える組織となっており、卒業生は医師として、実地医家あるいは勤務医になってわが国の第一線の医療を支え、医学研究・教育者として先端医療の開発などに携わり、あるいは保健衛生の行政職として、全国各地で活躍中です。

1-1) 山口大学医学部の創立

山口大学医学部の創立は、昭和19年の山口県立医学専門学校の開校に始まり、その後、昭和24年に山口県立医科大学へと昇格しました。昭和39年には県立医科大学から国立大学に移管し、山口大学医学部(医学科)となって現在に至っています。

医学部の母体となった医学専門学校の設立は、第二次世界大戦中に戦線が拡大することで軍医の養成が必要となり、全国に数ヶ所建てることが計画されました。山口県はこの計画に強い関心を持ち、宇部市では市議会ならびに宇部興産社長の渡邊剛二氏、宇部興産同仁病院長の水田信夫氏らの努力により、昭和19年1月山口県議会において、山口県立医学専門学校を宇部市に設置することを決定・認可しました。そこで、宇部市は下宮地にあった宇部商業学校を医専の校舎に充てることに決め、初代校長には京都大学医化学の富田雅次先生が着任して、昭和19年4月山口県立医学専門学校が開校されました。ところが、昭和20年8月に終戦となり、全国にあった多くの医学専門学校が統廃合されることになりました。宇部市は

昭和20年7月の米軍の空襲で焼滅状態になり、校舎も焼けたため、設備の不備な医学校は廃校になることが予想されました。そこで、本学の教員、職員、学生らは上京して陳情するなど、熱心な存続運動を起こし、昭和22年4月宇部興産沖の山同仁病院を附属病院にすることで存続が認可されました。そこで、昭和24年4月新たに山口県立医科大学として開校したという経緯があります。特に第1～2期の卒業生には、戦災と物不足の中でやっと医師免許を手にしたというご苦労があり、その当時の手記は創立30周年および50周年記念誌に残されています。

1-2) 同窓会・霜仁会の設立

同窓会発足の動きは、山口県立医学専門学校で昭和24年以来3回目の卒業生が出た頃に本格化し、昭和27年4月になり当時の松本彰学長が初代会長に、第1回卒業生の大場育三氏が初代幹事長となって第1回同窓会総会が開催されました。また、山口県立医科大学では昭和28年に1回目の卒業生が出た頃、医科大学同窓会設立の動きがあり、同じ校舎で学んできた医専卒業生と医大卒業生とで、2つの同窓会を作るのかという賛否両論の議論が行われました。色々な話し合いの末に2代幹事長の宮本茂氏の下で、昭和28年11月両者は合併し一本化することになりました。昭和29年5月の同窓会総会で名称を「霜仁会」とすることが決まり、ここに医学部同窓会・霜仁会が誕生しました。その名前の由来は、宇部市の北にある霜降山(ここには、1179年厚東氏7代武光により築城された霜降山城跡があります)の「霜」と、医は仁術なりの「仁」をとり、松本彰学長が命名したと伺っています。

2) 組織の沿革

2-1) 霜仁会会長の選出

霜仁会設立の当時から、すでに“山口県立医専の卒業生から同窓会長を”という声があったそうですが、未だ卒業生は医師としての経験・実績が少ないなどの理由から、昭和27年4月に医学部長が霜仁会会長に就任し、実際の会務は卒業生が幹事長として執務することになりました。

前述の通り、初代会長は松本彰医学部長(昭和27年より)で、初代幹事長は大場育三氏(昭和27年より)でした。次いで2代幹事長は宮本茂氏(昭和28年より)、3代が門田可宗氏(昭和29年より)、4代が伊藤穆氏(昭和30年より)です。2代目の会長は森茂樹学部長(昭和32年より)で、5代幹事長は志満俊雄氏(昭和32年より)、6代が岡本順二郎氏(昭和34年より)、7代が津永甲次氏(昭和35年より)、8代が佐々木通祐氏(昭和36年より)、9代が藤井英雄氏(昭和37年より)、10代が内野文彌氏(昭和38年より)でした。3代目の会長は中村正二郎学部長(昭和40年より)で、4代会長が井上一男学部長(昭和44年より)、5代が有蘭初夫学部長(昭和46年より)で、昭和40年から52年までの間の幹事長は、11代幹事長の林公男氏(昭和40年より)が継続して担当しました。

昭和48年になり、初めて山口県立医専の卒業生である坂田富士哉氏(昭和24年卒)が6代目の霜仁会会長に就任しました。以後、会長は卒業生から出しており、7代目の会長は林公夫氏(昭和52年より)で、12代幹事長は藤野巖氏でしたが、昭和54年から幹事長を廃止し、代わりに副会長2名を置くことになりました。初代副会長には渡邊裕氏と山本一男氏(昭和54年より)が就任しました。8代会長は山本一男氏(昭和63年より)で、副会長は小倉浩二氏と横山敬氏であり、9代会長は内野文彌氏(平成6年より)で、副会長は東良輝氏と水田英司氏でした。10代会長は藤野巖氏(平

成10年より)で、副会長は水田英司氏と浦山澄夫氏が務め、11代会長は東良輝氏(平成14年より)で、副会長は浦山澄夫氏と福田進太郎氏でした。12代会長は福本陽平(平成22年より)で、副会長は福田進太郎氏と藤村嘉彦氏であり、現在に至っています。

2-2) 霜仁会総会と支部結成

昭和37年の藤井英雄幹事長の頃、霜仁会会報が発行され、霜仁会総会が開催されて総会で幹事長が決まるようになり、同時に会費の徴収が始まりました。また、昭和38年の内野文彌幹事長の時、霜仁会に専任の事務取扱者が雇用されて事務局ができ、同窓会としての組織的な活動がスタートしたようです。

さらに、この時期に霜仁会支部を設立する事業が立ち上がり、栗屋二郎氏(昭和25年卒)と藤井英雄氏(昭和29年卒)が担当し、防府支部が中部一夫氏(昭和25年卒)を中心に結成され、豊岡支部(豊浦郡・下関市)は渡邊貞夫氏(昭和24年卒)が、萩・長門支部は大石保氏(昭和26年卒)が、大島支部は武居敏輔氏(昭和26年卒)が、岩柳支部(岩国市・柳井市)は松浦巖氏・松浦康彦氏(昭和24年卒)、檜垣慶典氏(昭和26年卒)が、山口支部(阿武郡・山口市・吉敷郡)は栗屋二郎氏が、周南支部(徳山市・下松市・新南陽市・都濃郡)は佐藤慶寛氏(昭和24年卒)が、宇部・小野田・厚狭支部は志満俊雄氏(昭和24年卒)、緒方正道氏(昭和26年卒)が中心となって、結成されました。一方、山口県外でも、島根支部が赤間宏氏(昭和26年卒)により、九州支部は宮本茂氏(昭和24年卒)が、四国支部は福谷啓也氏(昭和24年卒)が中心となって結成されました。

現在、霜仁会支部は、関東、中京、京滋、北陸、大阪、兵庫、岡山、広島、山陰、四国、岩国、柳井、周南、山口、防府、長門、萩、宇部、小野田、厚狭、美祢、下関、北九州、福岡、佐賀、長崎、佐世保、宮崎、熊本、大分、鹿児島、沖縄、山口大学医学部の33

箇所になり、各地で支部総会が開催され、活動が続けられています。

また、4年に一度開かれる日本医学会総会の折に、開催地の霜仁会支部で同窓生が集う「霜仁会懇親会総会」が毎回開催されています。最近では、第5回懇親会総会が平成11年4月に関東支部のお世話で、第6回が平成15年4月に福岡支部で、第7回が平成19年4月に大阪支部(京滋・兵庫支部の後援)で行われ、医学部長や附属病院長と共に会員一同が集合しました。第8回は平成23年4月に東京支部で開催する予定でしたが、3月に東日本大震災が起こったために休会となりました。

2-3) 霜仁会事業の展開

昭和43年、当時の林公夫幹事長が学術研究の発展と奨励のために、「霜仁会学会賞」の設立を提案しました。そこで、霜仁会学術振興賞(本賞・奨励賞)が設けられ、昭和54年には、社会において顕著な活動を行った同窓生を表彰する社会活動部門賞が創られました。昭和59年に、山口大学医学部産科婦人科学元教授の藤生太郎先生の遺志による寄付金を基金として藤生賞ができ、学術振興賞に加わりました。これらの賞は毎年公募が行われ選考委員会の過程を経て、霜仁会総会で表彰式が実行されています。近年、応募される論文の質が高まり、欧米の一流誌に掲載された業績が受賞するようになりました。

また、昭和55年には霜仁会は公益社団法人の認定を受け、諸事業を行う上で大きなプラスになりました。その後、国が新たに法人法を制定したため、定款の改定などを行い、平成25年4月に一般社団法人へと移行しています。

昭和56年に霜仁会は事業として宇部検査センターを吸収し、霜仁会検査センターを作りました。これは、昭和51年頃に同センターで産婦人科の細胞検査診断を始めたことに由来し、山口大学医学部病理学教室の協力の下に事業を続け、現在では検査センターを霜仁会医学交流会館内へと移しています。最近では、研

究用の病理組織標本の作製も行い医学研究の一助になっています。

平成9年5月には、念願の同窓会館(創立50周年記念会館)が医学部構内に竣工しました。同窓会館建設の声は、すでに創立30周年を迎えた頃から上がっており、様々な経緯を辿りながら、歴代霜仁会執行部の努力により、霜仁会員からの寄付金を基に山口大学医学部創立50周年記念事業として、日本庭園にマッチした洋風の会館が完成しました。また、平成20年1月に医学部に隣接する所に霜仁会医学交流会館を建設し、ここに本部・事務局と検査センター、医学交流のための会議室を置き、円滑な霜仁会活動が出来るようになりました。



霜仁会館

3) 現在の活動と今後の課題

3-1) 現在の霜仁会活動

霜仁会活動は定款に則り、医学教育・研究の振興、地域医療と公衆衛生の充実を目的とし、会員相互の親密な交流と啓発ならびに、母校である山口大学医学部医学科への支援・協力を行っています。年間の活動方針は毎年代議員からなる総会において決定し、執行部の役員は25名以内の理事と2名の監事を置き、理事の内から会長1名と副会長2名を選出しています。

会長は会務を7つの委員会に分け、毎月開催する理事会において各委員会での事業の進捗状況を検討しています。霜仁会総会ならびに各委員会での事業内容は、毎年4回発行す

る霜仁会会報によって会員に報告し、山口大学医学部・附属病院の動向や、各支部および会員の現状などもこの会報によって伝えるようにしています。

3-2) 今後の課題

現在、何といたっても学生会員を含めた若手会員が、霜仁会に親しみや関心を持ってくれることが重要課題です。霜仁会ではその一環として、平成19年4月から、病棟での実習が始まる5年生に大学のロゴマークのはいった白衣を

贈る白衣着衣式を行い、医師としての道を歩き始める諸君にエールを送っています。今後も、会員相互の親睦と母校山口大学医学部(医学科)の発展のために支援・協力を行って参ります。

謝辞：本文の内容の多くは、山本一男氏(昭和32年卒)の霜仁会会報250号、251号、252号、253号の記事や、山口大学医学部創立30周年記念誌、山口大学医学部創立50周年記念誌を参照しました。



(左)霜仁会創立50周年記念懇親合同クラス会 2002年9月15日 於 宇部全日空ホテル

6 | 双樹会(医学部保健学科)

[前身校]

・山口大学医学部附属看護学校(同窓会名 嫩会)

昭和 32(1957)年 4 月	山口県医科大学附属高等看護学校を設置
昭和 42(1967)年 6 月	山口大学医学部附属看護学校に改称

・山口大学医学部附属臨床検査技師学校(同窓会名 真締会)

昭和 35(1960)年 4 月	山口県医科大学附属衛生検査技師学校を設置
昭和 42(1967)年 6 月	山口大学医学部附属衛生検査技師学校に改称
昭和 47(1972)年 4 月	山口大学医学部附属臨床検査技師学校に改称

・山口大学医療技術短期大学部(同窓会名 山口大学医療技術短期大学同窓会)

昭和 54(1979)年 10 月	山口大学医療技術短期大学部を併設(看護学科)
昭和 56(1981)年 4 月	衛生技術学科を新設

山口大学医学部保健学科(同窓会名 双樹会)

平成 12(2000)年 10 月	山口大学医学部保健学科を新設(看護学専攻、検査技術科学専攻)
-------------------	--------------------------------

山口大学創基 200 周年記念を祝って

双樹会会長 米田 純子



山口大学は東京大学、東北大学に次ぐ3番目に古い大学として歴史をもつ国立総合大学で、その開学200年の記念行事に携われることに、大きな感激と喜びを感じています。

保健学科の沿革は、国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令の一部を改正する省令により、平成12年10月に山口大学医学部に設置されました。開設時に、看護学専攻、検査技術科学専攻の2専攻が設置されまして、平成13年4月から学生を受け入れています。

上記2専攻は、昭和54年10月に国立学校設置法の一部改正により、山口大学医療技

術短期大学部が山口大学に併設され、山口大学医療技術短期大学部の看護学科、衛生技術学科を母体としています。医学部保健学科になって同窓会名も「双樹会」と命名されました。看護学専攻、検査技術科学専攻の2専攻の2本の樹がしっかりと結びつき・支えあい、その結果、会員相互ならびに大学を同窓会が支えあい、盛り立てていくことのできる医療従事者を輩出し、日本の医療に貢献していこうという熱意のもとに、同窓会が1つになりました。

現在、双樹会会員数は、看護学専攻3,204名、検査科学専攻1,508名、合計4,712名となっています。

200 周年に寄せて

医療技術短期大学部 昭和 59 年卒 長田英一
(小郡第一総合病院)

自分の過ごした学生時代は医療技術短期大学部だったため、吉田キャンパスでの 1 年次の講義はなかった。入学後すぐに小串キャンパスでの大学生活が始まった。30 年余り前の出来事だ。短大時代の教官に「中学・高校と違って大学ですから自分たちで考えて勉強するところですよ。」と言われたことを思い出す。

私の出身は大分県で家を出てから、山口県での生活の方がかなり長くなった。私たちの学年は大学病院附属の臨床検査技師学校から山口大学医療技術短期大学に変わった直後であったため、先生方の熱心な指導を受けることができた。最終的には「国家資格」を取得する事が最大の目標であった。また卒業したら「すぐに使い者になる臨床検査技師」が山大のモットーであった。

半世紀を生きた人生で、一人暮らしを始めたのもこの時期からだ。お酒やタバコ、マージャンと一通りの大学生活を人並みに体験した。サークル活動や医学祭の経験もした。当たり前のことであるが、山口大学で過ごした学生時代に多くの初めての体験をした。それは同期の仲間や先輩方、先生方から教えてもらった。今思えば、物事の良し悪しにかかわらず、あらゆることをスポンジのように吸収して行けたのもこの時期だ。

検査の実習では検量線を引いたり、病理標

本のスケッチをしたり、血液のスメアを引いたりした。顕微鏡を覗きながら描く、臓器のスケッチは非常に難しく、絵画的センスが必要になるとは思ってもよらなかった。血液標本を作製するに当たっては、力の入れ具合のバランスが必要で、強すぎず弱すぎず、きれいなスメアが引けるまで随分と練習した。使った器具を洗剤で洗浄した場合は、すすぎを 20 回は行う。一般的には考えもよらない回数であった。正確な診断を行うには、きれいな器具や環境、きれいな標本が必要であると学生時代に教えられた。

私たちは移行期であったことから、病院実習が 1 年間あった。夜遅くまで実習がかかり、大学病院の指導する先輩技師にも多大な負担をかけてしまった。私はよく病院でフラスコなどの検査器具を破損した。山口弁で「また、やぶったんか!」と叱られた。

「山口大学に進学していなかったら?」と、考える時がある。国家資格も取得し、就職し、結婚、父親になり、家も建てた。人並みのことはできた人生の源は、山口大学にある。指導者や人との出会いで今の自分がここにいる。明治維新の立役者たちも、人と人とのつながりで偉業を達成できたと思う。先人たちを見習い人と人との関係を大切に、これからの人生を歩んで行きたい。



第 39 回医学祭(昭和 58 年)
医療技術短期大学部正門



白衣に着替えての実習風景



薬庫…整然と並べられた試薬

ここから始まった。

医学部附属看護学校 昭和51年卒 猪上 妙子
(山口大学医学部附属病院 看護部長)

私は、昭和48年に医学部附属看護学校へ入学しました。

当時の看護学校の教室は、現在保健学科ラウンジとして使用されている建物と、現2病棟1階東側にありました。入学当初は教室でワイワイやっていると先輩から「静かに」と注意を受けたこともあり、大変なところへやってきたなとびっくり、少し怖くもありました。

同級生39名のほとんどが寮生活を送り、「同じ釜の飯」を食べて3年間を過ごしました。初めての寮生活、講義と実習そして試験、ハードなカリキュラムをこなしながら、試験の前には後輩や先輩への慣れない夜食作り、先輩たちの過去問をみんなで回しながら、とにかくは「60点！」をめざし、体重計を気にしながら、しっかり夜食を食べて乗り切っていました。出席番号1番の私が返された答案用紙を見てほっとするとみんなもほっとしたり、ため息ついたりしたことを思い出します。

実習が終わり寮に戻って、一番先にすること

は、白衣(今はユニホームというけれど…)にビシッとアイロンをかけること、毎朝ナースキャップ(これも懐かしい)をつけて、ウェストをキュと締めていざ実習へ…。クラブに合コン、医学祭ではみんなで芸コンの準備に必死になり、また教務主任の故松尾縫先生からは事あるごとに、親心・看護の先輩としての温かくも厳しいお言葉をいただき、門限ギリギリには全力疾走しながら、勉強に遊びにと精いっぱい走った学生生活でした。

私は卒業後から現在まで附属病院で勤務しています。新山のおばちゃん、おにいちゃん、みつやのおむすび、二反田、小串マーケット等々、小串キャンパスの周囲はすっかり変わってしまいました。附属病院では病院整備計画が始まり、さらに変化していきますが、看護師の私はここから始まり、山口大学に守られて時を重ねてきたことをあらためて感じています。思い出がいっぱいです。



敏察(現：保健学科研究棟)前でのバレーボール



運動会での騎馬戦

7 | 常盤工業会(工学部)

昭和 21(1946)年	宇部工業専門学校同窓会発足 初代会長に高良吉宗氏就任 同窓会名簿発行
昭和 28(1953)年	宇部工業専門学校同窓会を発展的解消し、同窓会「常盤工業会」発足 第2代会長に柳井正人氏就任
昭和 36(1961)年	会員名簿発刊 運動資金不足により活動を縮小
昭和 48(1973)年	常盤工業会を再建発足
昭和 51(1976)年	常盤工業会会報『常盤』を創刊
昭和 53(1978)年	学生食堂「工友館」の運営に参画
昭和 57(1982)年	社団法人に移行
昭和 59(1984)年	50周年記念事業会発足
昭和 63(1988)年	常盤工業会館竣工
平成 9(1997)年	常盤工業会館増築
平成 24(2012)年	一般社団法人に移行

工学部同窓会「常盤工業会」の沿革と活動の現状

常盤工業会元副会長 梶返 昭二（山口大学名誉教授）

I. 同窓会の沿革

学生の活動援助、名簿の印刷発行などを行った。

(1) 常盤工業会前史

昭和 16 年 12 月、工学部の前身である宇部高等工業学校の第 1 回卒業生 163 名が学窓から巣立って行った。以後、将来の同窓会設立を目指して、昭和 19 年 9 月の第 4 回卒業生まで、卒業時に設立資金が積み立てられていたが、戦後の預金封鎖で凍結され、同窓会設立の計画は頓挫した。

その後、卒業生有志の間で同窓会設立の機運が高まり、昭和 21 年 11 月に開催された第 1 回総会で、高良吉宗(精密機・昭和 16 年卒)を初代会長に選出し、同窓会が初めて発足した。その活動の始めとして、ガリ版刷りの同窓会名簿を同年 12 月に出した。

以後、母校への種々の金銭的サポート、在

(2) 常盤工業会の発足

常盤工業会の前身である「宇部工専同窓会」は、上述のような活動を行なったが、母校の宇部工専は、昭和 26 年 3 月に最後の卒業生を送り出して自然廃校になった。

昭和 28 年 4 月、母校の大学昇格後初めての卒業生が巣立った機に、宇部工専同窓会は発展的に解消され、高工・工専・工学部の全卒業生を対象とする同窓会「常盤工業会」が、新たな会則を定めて発足することとなった。第 2 代会長には柳井正人(採鉱・昭和 16 年卒)が就任し、最初の仕事として同窓会名簿(昭和 28 年版)の編集作業が開始された。この名簿は本格的な印刷製本によった。

また、この機に、宇部市内近郊の各職場を単位とする同窓会支部が結成された。

ついで、昭和36年10月には、会員名簿(昭和36年版)が完成した。この名簿の発刊には、同窓会の基盤を確立する願いが込められていたが、運動資金の欠乏や人手不足で、会の活動は縮小を余儀なくされた。

そして、これより約10年後に常盤工業会の再建がなされるまで、同窓会活動は、各学科の同窓会により維持、存続されることとなった。次にそれらを列挙する。

- ・機械工学科同窓会(昭和40年頃に発足)
- ・資源工学科同窓会(工専時代の採鉱科・鉱山機械科、大学時代の鉱山学科・資源工学科により編成)
- ・工業化学科同窓会(常盤化学会)(昭和31年7月に発足)
- ・土木・建設工学科同窓会(土木和会)(昭和33年に土木工学科同窓会として発足)
- ・電気工学科同窓会(昭和37年7月発足)
- ・生産機械工学科同窓会(昭和46年発足)
- ・化学工学科同窓会(昭和48年発足)

(3) 常盤工業会の再建

昭和47年初頭、有名無実化していた常盤工業会を再建しようとする機運が高まり、当時工学部長であった同窓生の荏木浅彦(採鉱・昭和17年卒)の呼びかけで、同年11月、宇部近郊在住の同窓生有志と工学部に在職する同窓生らで、昭和48年4月新会則を定め、晴れて常盤工業会が再建発足した。

第3代会長には奥山勝美(精密機・昭和16年卒)が就任し、同年6月、会員名簿の発行を中心とする母校創立35周年記念事業の募金活動に着手。この名簿の編纂には多大の労力を要したが、吉野隆(工化・昭和19年卒)ら母校在職者の努力により、同年8月に発行された。昭和50年5月、藤津哲夫(採鉱・昭和17年卒)が第4代会長となった。

昭和51年2月、庶務幹事齊藤隆(土木・昭和32年卒)を編集責任者として、念願の常

盤工業会会報『常盤』が新聞タブロイド版で創刊された。年1回の発行で、以後昭和55年の6号までこの形式で刊行された。

昭和52年6月に第5代会長に貞永貞雄(工作機・昭和18年卒)を選出し、年会費を徴収する登録会員制をとることとなった。

昭和53年4月には、工学部当局からの要望を受け、旧常盤寮の新寮への建替えに伴い新築された学生食堂「工友館」の運営に参画し、やっと専従職員1名を確保した。

翌昭和54年5月には、母校創立40周年記念写真集を発行した。また会報『常盤』は、時の編集委員長・梶返昭二(工化・昭和23年卒)の提案により、昭和56年発行の7号から誌面をA5判横書き冊子に改め、年2回定期的に発行された。会員名簿は、隔年定期発行となった。

(4) 常盤工業会の会館建設と社団法人化

同窓会再建後の次の大きな目標は、独自の同窓会館を持つことであった。

まず建設候補地として工学部構内の敷地借用が考えられたが、文部省に認められず、ついであちこちの私有地が候補にあがったが、結局、当時の工学部テニスコートに面する中国電力所有の空き地に絞られた。貞永会長らの精力的な働きかけにより、同窓生の中国電力(株)常務・和泉晋一(機械・昭和17年卒)の協力を得て、極めて好意的な条件で、昭和56年9月、先ず452.8m²(137坪)が確保された(なおその後、昭和60年5月に更に525.9m²(159坪)が追加購入されている)。

かくして最適地に会館建設用地が入手されたが、次のステップとして、会の法人化が急務となった。そのための設立趣意書と定款案が作成され、各種事務手続きを経て、昭和57年7月、県の許可を得、晴れて「社団法人常盤工業会」が誕生した。その後、昭和58年に会館設立準備委員会が発足し、昭和59年に会館の建設を中心とする50周年記念事業会が発足した。

以下に会館完成までにたどった道程を、年月



会館全容



会館宿泊室



会館ロビー



平成 26 年総会

を追い、項目のみ挙げて記す。

- ・昭和 59 年 12 月：50 周年記念募金趣意書を全国に発送し募金活動開始。なお、昭和 60 年 5 月、会長に河野悟（機械・昭和 19 年卒）選出
- ・昭和 61 年 12 月：『常盤』18 号（50 周年記念特集号）で募金状況の報告と募金促進
- ・昭和 62 年 8 月：会館建設起工式
- ・昭和 63 年 2 月：会館竣工式
- ・昭和 63 年 4 月：会館竣工披露祝賀会

常盤工業会会館の完成により、母校の一室借用の事務局も新しい会館に移り、事務局長・田代菊丸（採鉱・昭和 22 年卒）がその運営に専念した。平成元年秋には目標額の 1 億円を突破、50 周年記念事業は完了した。

なお、この会館は、立地条件の良さから、母校工学部の教育活動に利用され、また種々の会場としても利用されることとなった。

その後、一層の充実を図るため、会館施設の隣接地を駐車場及び増築用地として、平成 5 年 10 月、中国電力㈱より 857m² 入手した。ついで、平成 7 年 2 月に常盤工業会会館増改築事業募金を開始、平成 8 年 8 月増改築起工、翌 9 年 3 月竣工して、現在の瀟洒な白

亜の常盤工業会会館が完成した。同年 5 月に第 7 代会長として佐々木孝治（機械・昭和 35 年卒）が就任した。

II. 常盤工業会の活動の現状

(1) 会員相互の交流活動

近年、常盤工業会は、約 24,000 名の会員と、全国に約 40 の支部をもつ大きな規模に成長した。本会は、年 2 回（7 月と 12 月）常盤工業会誌『常盤』（平成 16 年発行の 54 号より B5 判に変更）を発行して、会の活動や行事予定、さらには母校の様子等を広く伝えている。また、隔年ごとに会員名簿を定期的に発行（個人情報保護云々のため、名簿は 2003 年（平成 15 年）版発行以後中止）した。



常盤工業会会誌「常盤」

- (2) 母校の教育・研究活動に対する助成、地域における工学教育振興等の社会的活動
以下に、母校への支援事業を列举する。
- ・工学部の「常盤工業会奨学金」制度への支援及び学生の人材育成等の支援
 - ・学生のサークル活動、学園祭に対する助成
 - ・就職支援特別講義の実施
 - ・「常盤賞」の授与(優秀な学生の表彰)

地域の工学教育振興事業としては、県内の小中学生を中心に、将来を担う人材育成事業への助成を行なっている。また国際交流事業の一環として留学生と日本人との交流の場を設けている。

工学部では平成20年、「工学部創立70周年記念事業」を立ち上げ、その主な事業として「学術資料展示館」を開設したが、その建設資金獲得に、当会が大いに貢献した。

(3) 「一般社団法人」への移行について

平成20年12月の公益法人制度改革により、常盤工業会は公益社団法人か一般社団法人のどちらかを選択せざるを得なくなった。そこで鋭意検討の結果、「一般社団法人」へ移行することを選択し、そのための新定款案作成の準備にとりかかったが、現行定款に沿う「総会」を開催する必要があった。

常盤工業会では、従来「評議員会」を総会として開催していたが、行政庁より指導を受けることとなった。そこでまず、現行定款に代議員制を導入し、1万人以上の委任状をとり、形として11,000余名の出席のもとで臨時総会を開催し、平成23年度から「代議員制による総会」の開催を可能とした。かくして選挙で、初の代議員を選出した。

平成23年5月、代議員制を導入した初めての通常総会が開催され、一般社団法人常盤工業会の新定款案を決議した。

その後、行政庁との協議を重ね、認可され、平成24年4月1日付で、ようやく「一般社団

法人常盤工業会」への移行登記が完了した。

(4) 「一般社団法人」としての常盤工業会

一般社団法人としての「常盤工業会」の概要を次に示す。

会員構成：会費納入会員が正会員となる。正会員から選出された代議員が、法人法上の社員となる。全国を6ブロック(東日本・東海北陸・関西・中四国・山口・九州)に分け、ブロックごとの定数を決め、2年に一度代議員選挙を行う。
役員：理事及び監事を置く。理事のうち1名を会長に、3名以内を副会長とする。会長が法人法上の代表理事となる。

総会：総会の構成員は代議員で、この総会をもって法人上の社員総会とし、総会は、会の最高意思決定機関となる。

理事会：法人の業務執行の決定、規則の制定、改正及び廃止等の職務を行なう。

事業内容：

公益目的支出計画における公益目的事業

①特定寄付—山口大学工学部および山口大学後援財団への寄付

②継続事業—人材育成支援事業

その他の事業

①山口大学学生に対する教育支援事業

②地域の学術及び文化の発展に寄与する事業

③会員相互の交流及び相互啓発に資する事業(会誌刊行、地域同窓会交流事業等)

④山口大学同窓会支援事業

⑤収益事業

以上

上記のように、常盤工業会は、平成24年4月から、装いも新たに「一般社団法人常盤工業会」となり、佐々木孝治会長の統括のもと、役員および職員が一体となって会の発展のために尽力し、現在に至っている。

8 | 農学部同窓会(農学部・共同獣医学部)

昭和 34(1959)年	山口獣医畜産専門学校及び山口大学農学部同窓会を統合して山口大学農学部同窓会発足 初代会長に坂田利明氏就任
平成 13(2001)年	山口獣医畜産専門学校跡地に記念碑建立
平成 22(2010)年	下関市長府の農学部跡地に記念碑建立
平成 24(2012)年	共同獣医学部設置に伴い、山口大学農学部・共同獣医学部同窓会(仮称)として運営

農学部同窓会— 歴史のひとコマ

農会前常任幹事長 田中 秀平(山口大学教授)

1. 同窓会概要

1) 設立

農学部同窓会は、農学部の創設母体である山口獣医畜産専門学校(昭和 19 年設置)卒業生と山口大学農学部(昭和 24 年設置)卒業生で構成されている。これらは、異なる二つの同窓会であったが、昭和 34(1959)年に統合され、現在に至る。

山口大学農学部は、下関長府時代には農学科と獣医学科の 2 学科制で学生定員 1 学年 60 人、昭和 41(1966)年に現在地の山口市吉田に移転後、農芸化学科新設により 1 学年 100 人となった(平成 24 年 3 月時点で学生定員 130 人)が、いずれにしても規模の小さい学部として推移してきた。従って、同窓会の会員数も平成 24(2012)年 3 月時点で約 6,100 名(物故者含む)に留まっており、山口大学の中では規模の小さい同窓会である。しかし、小人数の学部であったからこそ、教員・事務職員も含めた人と人の交流が濃密で、学生時代の体験と学びは卒業生にとって人生を支える大きな財産となっている。

2) 組織運営

統合後の山口大学農学部同窓会の初代会長を坂田利明(元獣医専同窓会理事長、獣

医専 1 回卒)がつとめた。その後、中野蕙二(獣医専 5 回卒)、新谷孝之(獣医専 2 回卒)、田中敏正(獣医専 4 回卒)、岡野幸男(農学科 9 回卒)、小川 信(農学科 3 回卒)がそれぞれ会長をつとめ、現会長を稲原輝昭(獣医学科 8 回卒)がつとめている。会長就任者には山口県庁OBが多い。一方、歴代会長の中でも中野蕙二は旧教官で、現職当時から 15 年間もの長きにわたり会長をつとめ、諸々の課題に奔走し貢献された。また、小川信は、山口県農業協同組合連合会職員を経て衆議院議員をつとめ、その後同窓会長に就任している。

同窓会の事務局体制は、会則により、会長・副会長と農学部勤務する職員(主に教員)により構成される常任幹事会が担うこととされている。統合後の同窓会事務局では常任幹事長・総務を浜崎詔三郎(農学科 8 回卒)が、会計を山根秀夫(農学科 6 回卒)が担当する体制が長く続き、ご苦労いただいた。農学部には他にも数人の卒業生が教員として常時在籍していたので、他の業務にはこれらの教員が分担し当たってきた。前述のとおり本会は小規模同窓会であることから、事務局に事務職員を配置せず、諸々の雑務も含め全ての業務を卒業生教員の手作業で行ってきた。この体制は基本的に現在も変わらない。浜崎・山根体制の後、常任幹事長は、

松富直利(農学科 17 回卒)、田中秀平(農学科 20 回卒)を経て、平成 24(2012)年度から音井威重(獣医学科 30 回卒)が担当している。

3) 事業

会報と会員名簿の発行および総会開催が定期的な事業として行われている。会報は 5 年に 1 回の発行であったが、平成 10(1998)年から毎年発行となり、平成 24 年度には第 25 号を発行している。また、3 年に 1 回発行してきた会員名簿は、当初は無料配布していたが、平成 10(1998)年からは作成を業者委託とし有料注文制に変更した。会の財源が、会員名簿発行のたびに半減し、大きな財政負担となっていたことが背景にある。

同窓会事業のひとつに支部会、同期会、研究室同窓会等への開催補助金制度がある。会員名簿を有料としたことで会の財政が上向きとなったことから、新たな会員サービスとして開始された。金額的には通信費程度にしかならないが、多少なりとも会員の交流推進を支援できればとの考えによる。

2. キャンパス移転と記念碑

農学部は獣医畜産専門学校の時代を含め 2 回の移転をしている。移転をめぐる動きや移転先での生活に、当時の教員・学生の中に様々なエピソードが残されている。同窓会報や同期の仲間と出版された「記念誌」等から、当時の状況を伺わせる記事をひろってみた。

1) キャンパス移転 1 (小郡から下関長府へ)

獣医畜産専門学校は当時の吉敷郡小郡町(現在の小郡ふれあいセンター)に在ったが、昭和 23(1948)年 12 月に下関市長府町に移転した。獣医畜産専門学校第 4 回卒 50 周年記念誌「角笛」に小田良助先生(旧教官、現山口大学名誉教授)による次の記述がある。

「…(前略)昭和 23 年 12 月 13 日いよいよ下関市長府町へ移転することになった。…(中

略) …私は軍隊で兵馬輸送の経験があり、年齢も若いことから、国鉄貨物車輸送の学校側責任者に抜擢された。事務室の机や椅子、戸棚類。研究室の備品や実験台、標本、学生机と椅子などが日本通運の馬車隊によって小郡駅に運ばれ、貨物車に搭載された。全部で 12 車輛位あったと思う。…(中略)…新校舎は、長府駅から約 1km の距離にある江下町に事務室、校長室(学部長室)、講堂、会議室、食堂と売店、それに来年度から入校する農学科関係の教官室、研究室と講義室が設置され、隣の前八幡町には、山口獣医畜産専門学校と新制獣医学科共通の教官室、研究室、それに付属家畜病院が設置された。

このように書くと如何にも立派なように思われるが、これらの校舎は戦前、神戸製鋼所の社員寮であったものをニュージーランド進駐軍が接收して使っていた。彼らが本国に引き揚げ空き家になっていたものを改修して校舎にしたもので大変お粗末そのものであった。大学当局は直ぐにでも山口に新校舎を建設するからと口癖のように言っては宥められた。結局 18 年間辛抱した。一方、長府町は城下町で人々は上品で親切であった。……(後略)」

このような状況の中で、山口への移転または新校舎建設は教職員ばかりでなく学生の間でも念願となっていた。同窓会報第 15 号に佐古宣道氏(農学科 8 回卒、元佐賀大学・九州共立大学学長、元山口大学監事)の次の記述がある。

「…(前略)当時の長府は、毛利藩の城下町としての色合いの濃い落ち着いた町並みでしたが、…(中略)…農学部の校舎はかなり老朽化が進んだボロ校舎でした。農学部自治会の委員長として、校舎の新築あるいは学部の統合移転についての要望書を持参して、当時の松山学長にお会いし、直にお願いしたことがあります。」

一方、当時の学生生活について、同窓会報に岡野幸男氏(農学科 9 回卒、元同窓会会長)による次の記述がある。

「…（前略）《友人》日常的に同級生、先輩、後輩との付き合いも密でした。研究室ではゼミを通じた意見交換、松原寮では時としてアルコールをまじえて深夜までの語り。故郷のこと、映画のこと、欠席した講義のノートの貸し借り。これは学生数が少なかったこと（同級生は農学 22 人、獣医学 17 人）、また他の学部との交流がほとんどなかったこともあるのかもしれませんが。しかし、人数の多寡は別にしてもこの時の友情は今も小生の心に宿り続いています。

《町の方々》 小さな城下町・長府の方々は大変お世話になりました。下宿のお婆さんは母親代わり、家庭教師のお宅では家族ぐるみでおつき合い頂き、うまい夕食をご馳走になりました。（後略）…」

2) キャンパス移転 2

（下関長府から山口吉田へ）

農学部は、昭和 41(1966)年 10 月に下関市長府から山口市吉田の現在地に移転した。農学部の山口市移転をめぐる次のエピソードが、上田正士氏(獣医学科 13 回卒、元同窓会副会長)により記述されている(同窓会報第 23 号から)。

「…（前略）農学部自治会活動で忘れられないことがある。定かではないが、3 年時終わりか 4 年時早々の頃だった。下関市長(当時は木下市長?)から「農学部学生さんの本音を聞きたい」との申し出があり、小生もメンバーの一員として参画した。美しい大きな庭園の記憶があるので、場所は毛利長府庭園ではなかったろうか。市長から「25 万市民を擁す県最大の都市下関としては、唯一の国立大学としての農学部を残したい。新たな用地も確保するので、学部存置に協力が貰えないか」というものであった。数日後、自治会は学部長(弥富先生だったか)に面談を実施し、市長の要請を伝えたところ、「字部の 2 学部を除く全学部が山口市平川に移転統合する方向で進んでいる。文部省もこの案を既に了承済みである。後戻りは不可能。」との説明を受け、農学部の山口移転が確実になっていることを知った。かくして

下関在置案は儚くも潰えた。（後略）…」

下関市には、農学部を下関に残したい意向があったようである。一方、学生の間には、校舎の新築を望みながらも、城下町長府への深い愛着があり、山口移転には後ろ髪引かれる思いもあった。濃密な友人関係と友情そして市民の方々から大切かつ親身にお世話いただいたこと、これらへの感謝の気持は今も変わらない。

山口移転の際の詳しい記述は手元の資料には見あたらないが、同窓会報第 23 号に次の記述がある。

「…（前略）当時農学部は下関長府にあり、驚愕するほどのボロ校舎でした。すでに山口吉田への移転計画が進行中で、補修には金をかけない様子の実験室の床はかなりの部分で、モルタルがはげ土が見えている状態でした。…（中略）…夏期休暇を利用していよいよ新校舎への引っ越しです。食品化学・土壌肥科学共同学生実験室は一階売店横(後に学生談話室、現学務係事務室)にあり、実験台はこれまでとは雲泥の差で白木の厚さ 5 cm 天板の 3 枚合わせでした。塗料を塗るのはもったいないくらいでしたが、長持ちさせるためにとのことで小林邦彦先生のご指導で耐薬品性のアニリンブラック染料を数回塗り重ねました。また、引出しにはガラスピペット類が収納できるよう手作りの固定枠を付けたのも思い出に残っています。」(松富直利氏、農学科 17 回卒、元同窓会常任幹事長、現山口大学名誉教授)

3) 記念碑建設

2 回のキャンパス移転に関わる記念碑が二つある。一つは「山口獣医専跡地・山口大学農学部獣医学科発祥の地」を記念するもので、小郡町下郷(現山口市)の獣医専跡地である「小郡ふれあいセンター」と道路をはさんで向かい側の道路沿いに建設されている(写真)。建設の経緯について同窓会報第 14 号に山縣宏氏(獣医専 3 回卒)の次の記述がある。



山口獣医畜産専門学校跡地に建設された記念碑(山口市小郡)

「…(前略)山口大学獣医学科の前身である山口獣医専門学校は、敗色日毎に深まる第二次世界大戦末期の1944(昭和19年)4月、山口県小郡町下郷に創設された。以来通算50有余年、半世紀以上の星霜を閲した今日、いささか遅きに失した感があるが、“発祥の地に記念碑”をとの議が興った。趣意を踏まえて、山口獣医専、山口大学獣医学科卒業生及び縁りの方々の基金を仰ぎ、過半来、建立事業を進めて来たが、このほど除幕式を開催(平成13年3月4日)する運びとなった。

発祥の地にふさわしい、そしてまた、関係者の熱い憶いを託した、この1基の石碑が、創立の歴史的背景、建学の精神、等々を未来永劫に社会、後進に伝えてくれることを切願するものである。」

また、もう一つの記念碑は下関市長府の農学部跡地(現下関市長府運動公園)に、2010(平成22)年に建設されている(写真)。前述のとおり、長府時代の卒業生には長府の町への大変熱い思いがあり、以前から記念碑の建設を望む多くの声が寄せられていた。山口大学開学60周年を機に、当時の同窓会長小川信の決断により記念碑の建設事業を行うこととなった。早速、会員に募金を呼びかけたところ、建設経費を上回る額の基金が集まった。

除幕式当日の様子が同窓会報第23号に紹介されている。

懸案となっていた「山口大学農学部創設の地」記念碑が、平成22年3月末に下関市長府町江下の下関市長府運動場内(旧農学部

本部並びに農学科跡地)に完成し、4月24日に除幕の式典を挙行了しました。

当日は、ご来賓として山内直樹農学部長、中尾友明下関市長、田原望武先生(旧教官)にご臨席いただき、また同窓会から小川会長、上田副会長、岡野前会長、中野元会長、藤岡さん(下関支部)はじめ会員10名が出席しました。

式典では、除幕の後、小川会長が挨拶の中で「農学部学生が17年間、長府の方々に大変お世話になったこと」の御礼を述べ、また山内農学部長と中尾市長からも暖かいご祝詞をいただきました。」

多くの卒業生が長府の「山口大学農学部創設の地」記念碑を訪ねている。中には数回訪ねたという卒業生もいる。この碑の前に立つだけで青春の日々の輝きが鮮やかに蘇ってくるのであろう。



農学部長府校舎跡地に建設された記念碑(下関市長府町)

3. 今後の同窓会組織

平成24(2012)年4月、山口大学と鹿児島大学の獣医学科による共同獣医学部の設置により、旧農学部はふたつの学部に分割された。学部に合わせて、同窓会組織もふたつに分割する案もあり得るが、当面は山口大学農学部・共同獣医学部同窓会(仮称)として従来通りの組織で運営することとしている。長府時代の卒業生の間には、学科を超えた深い交流、友情が築かれており、同期会もしばしば合同で開催されている。小さな同窓会であることの良さやその歴史を今後も大切にしていきたいものである。

注)獣医畜産専門学校の設立の背景と歴史並びに国立大学移管の経緯は、山縣 宏氏(獣医専3回卒)により「山口獣医学雑誌」37号23-30頁に詳述されていて興味深い。

9 | 技経会(技術経営研究科)

平成 19(2007)年

技術経営研究科同窓会「技経会」発足
初代会長に田上實氏就任

技術会副会長 福代 和宏

I 同窓会の沿革

同窓会会員の特色とも関係するので、本稿ではまず、技術経営研究科の沿革について述べておく。

大学院技術経営研究科は技術経営人材育成を目的として平成 17(2005)年 4 月に開設された専門職大学院である。学生は主として西日本各地の社会人である。

技術経営研究科は、設立当初、宇部教室において教育を実施していたが、北部九州地域における技術経営人材育成のニーズに応えるべく、平成 18(2006)年度には北九州市小倉北区に北九州教室を開設した。さらに翌平成 19(2007)年度には、中国地域全体の人材養成ニーズに応えるため、広島市中区袋町に広島教室を開設した。

平成 22(2010)年度には九州地域の社会人学生の通学の便をはかるため、北九州教室を福岡市博多区博多駅東に移転した。また、広島教室についても、より交通の便の良い場所を求めて広島市中区袋町から中区立町へと移転した。これにより中国・九州地域を広くカバーする、現在の宇部・広島・福岡の 3 教室体制となった。

平成 25(2013)年 10 月からは、教育のグローバル化を図り、宇部教室において全科目英語による講義を開始した。

本研究科で学ぶ社会人学生の年齢層は 20 歳代から 60 歳代までと幅広い。技術と経営の二つの視点から問題解決に取り組む人材を育成するという目的から、学生の業種も特定のものに限られてはいない。製造業を中心としつつ、サービス業、官公庁などに勤める人々も入学している。

第一期生が修了したのは平成 19(2007)年



平成 24 年度修了式典並びに同窓会後の集合写真

3 月のことである。このとき、同窓会組織として「技経会」が設立された。初代会長には第一期生の田上實氏(日立建設株式会社代表取締役社長)が選出された。

平成 25 年 3 月には第二代会長として丸山博氏(平成 21(2009)年度修了生・株式会社キューヘン常務取締役)を迎え、現在に至っている。

「技経会」は、毎年、十数名の修了生を会員として迎えているが、上述の経緯もあって、どの学年を取り上げても、学生の年齢、業種、勤務地、国籍などに他の学部・研究科に見られないような多様性がある。

II 活動概要

先に述べた「技経会」会員の多様性の他、会員がかつて学んでいた教室が 3 か所に分かれているということもあり、「技経会」は全体としては緩やかな繋がりを持った組織となっている。

「技経会」会員全員が関わる公式の活動としては毎年 3 月に修了式と同時に開催される総会がある。その他、会員向けサービスとして、メールマガジンの配信が平成 26 年度から始まっている。

それ以外の活動は会員の出身教室ごとに行われている。福岡教室・旧北九州教室出身の会員が経営に関する勉強会を年 4 回程度開催しているのがその一例である。